蘆屋道満大内鑑

作者　竹田出雲

序詞風に嘸ぶ靑嶂の外。雨に嘯く古林の中尖れる鼻先蔓る尾。小前大後色中和を兼ね。死すれば丘を首にす是此妙獸。百歳誰か知らん女と化し。苔の褥に草枕契を人に同うす。葉末の露や末の世に日月星度の光を掲ぐ。昔を問へば天地の。惠に育つ蘭菊やオロシ花ぞ都の。香に匂ふ。地朱雀帝の皇子櫻木の親王東宮に立たせ給ひ。御息所は左大將橘の朝臣元方の御娘。又參議小野の好古の御息女六の君と申せしも。錦帳に冊かれ二人の君は兩翅。比翼連理の御語らひフシ淺からざりし御仲なり地されば朱雀帝賢王と申せども。天地の氣候陰陽の狂ひにや此頃出づる月影の。白虹に貫かれ甚だ光を失へば。東宮の御方に於いて此事評議有るべしと勅を請け。左大將元方小野の好古諸寮の司末々の官掌まで次第を亂さず參列し。畫迄殘る月影の空を眺めてとりどりに。愚意を述ぶるも及びなきフシ雲を掴むが如くなり。地左大將笏取直し。詞つら〳〵思ふに三千世界月一つ日一つ。天竺で見るも唐で見るも月日の光に二つはなし。然れば白虹月を貫く此天災。强ち日本の祟とも一圖には定めがたし。萬一唐天竺の禍なれば心を惱す程が失墜。地なんぞ是といふ形の見ゆる時。評議なさるとも遲かるまじ。此儀は此儘捨置かれフシ然るべしと相述べらる。地小野の好古正笏し。詞イヤ〳〵それは理窟一遍。聖主天下をしろしめす民を惠の御心に外れたり。間近く喩を取つて言はゞ。日月の蝕の如く。此日本の內でさへ東國で見えぬ時も有り。西國で見えぬ折も有り。地況や境を隔てたる唐天竺。日蝕とも月蝕とも知らずに濟す事も有るべし。詞此度の天變も其通。唐天竺はいさ知らず。眼前明かに見付けたる日本の禍ならずとは言ひ難し。かく言へばとて其家に有らざる地此好古。是非を申すも下オシ恐多く。過し頃身まかりつる天文の博士。詞加茂の保憲が娘神の前と申す者。女なれども其家に育ち父が傳への片端を。存ぜぬ事は有るまじと召連れたり。地女なれば恐も有るまじ。召されて仔細を御尋有るべうもやと。御免を受けて呼びつたふフシ聲をしるべに。立出づる。始めて上る雲の上オクリさすが女の氣も弱く。長地薄氷を踏む如くにて胸はうつせの襠姿おめず場うてぬ顏

しても。ッそゞろ顫うて畏る。地左大將きつと見。詞加茂の保憲が娘榊とは汝よな。男子なれば親が遺跡勤る年ばい。傳へ知つたる事有らば此度の天變きつと考へ。地善惡を包まず眞直に申上げよと仰せける。詞是は恐れ有るお詞。女の事なれば傳へし事は地なれども豫ゝ父上の門弟衆に。敎へ給ひしを餘所ながら承り置きしが。詞一つの眞丸な物を宙に釣つて置けば。其丸い物に自然と東西南北上下も定る。是を月日にたとへて。西は天竺東は唐。南は日本北は何處と分野といふ物をわかつて。諸事考ゆるが先づ天文の手習。伊柴諸伊柴冊の尊天照太神を生み給ひ。此子光花明彩六合の内に照徹る。天に送つて天上の事を授けんと。天に送りやり給ふ是今日の日天子。當今朱雀の帝樣も同じこと。又次に月讀の尊を生み給ひ。是も明彩き日の神に劣らず。日にならべて天上の事をしらせんと。共に天に送りまつる是れが今日のッシ月天子。地日の神にならび給へば恐ながら東宮。櫻木の親王樣も同じこと。詞此度の天災。白虹日を貫けば天子のお身の祟りなれども。月の躰を貫きしは東宮樣の御慎み。下として上を冐すといふ天道のお知らせなれども爰に一つの助けがござんす。二十八宿の星の中。女と。鬼と申す二つの星月の傍を離れず。女はをんな。鬼はおにといふ字にて。女の鬼は悋氣の妬み。上を冐す禍とは申せど。國を亂し民を損ふ迄はなし。女中方の慎で此禍は。科戸の風の天の八重雲を吹き拂ふ樣に。さらり〳〵と消えて行くと知つたがましう申上ぐるも聞き傳法。易は變易なりとやらん申せば。女の地及ぶ事でなし。私の父天文の名を揚げしも。唐土の伯道仙人より。金烏玉兎集といふ書を傳へ。近き君の守護と成り惡事を善事に轉じかへし。豫ゝ其書を保名殿に讓らんとは申されしが。急病故に何の遺言もなく。館の内に勸請せし大元尊神の社に其書を納め。箱の鍵はみづから扉の鍵は母に預け果てられし。あはれ道滿保名の兩弟子の中。いづれになりとも書を讓らばかゝる大事の御時の。御用は缺かじと憚なくいふ事いうてしまひしはッシさすがに親の娘なり。地六の君御褥を轉び出給ひ。詞榊とやらんの詞の端。此禍は女の妬みと聞くも恐ろし身が縮む。和歌三神を誓にかけ。地自らが心に妬み嫉みはなけれども。御息所のましませば。もしはさもしい氣も有るかと。人のさげしみ恥かしゝ。お情は忘れがたけれどもお暇を賜りて。尼法師ともなしてたべ。父上なうと好古の袖にメエテ縋りて泣給へば。御息所も御涙。なう其言譯は君よりも自らが心が猶恥かしい。其許に

お暇賜らば自らも身をすべり。同じ庵の伴ひぞやと。ッシ同じく褥を出給へば。地東宮暫しと止め給ひ。詞日頃仲よき程有りて互に貞女の道を守る。地しほらしや頼もしや。何事も丸が心に有り無狀き所爲ばしし給ふなと。奥にすゝめ勞らせ。詞女ながら榊が訴へ謂れ有り。其道滿保名とは誰やらんと問はせ給へば。左大將さん候。道滿と申すは廬屋の兵衛と申す某が召使。保憲が門弟の第一番。保名と申すは好古の家來。天文の稽古遂に聞かず。委細好古に御尋ねと。申上ぐれば取り敢へず。安倍の保名と申すは某が家來希名と名のりし者。年來天文に心を委ね保憲が門人と成り。師匠の保の一字を赦され保名と改め候ふと。地二人の訴へ詳に聞召し。保名道滿。其業に甲乙なければこそ保憲が存生に。いづれへも書を讓らず身まかりけん。此上は左大將の執權岩倉治部。好古の執權左近太郎二人立合ひ。大元尊神の神慮に任せ。いづれなりとも神の心に叶はん方へ。金烏玉兎の書を與へよと宣へば。地御供に候せし岩倉治部左近太郎。階下に平伏し畏る。詞治部大輔左近太郎とは汝よな。地四海の悅びは丸が悅び。丸が歎きは四海の歎き。是おぼろけの業ならず必ず互の贔屓を拒み。神慮に違ふ事勿れと入御ならせ給ひける。仰げば高き久かたの空に限はなけれども。それさへ爰に暈りしる君が。御代こそ三竜へ打榮えて。ッシ世は春ならし。青柳の。いと媚めける乘物は。加茂の保憲の息女榊の前。禁裡を下り歸るさや。附附女中の取りなりも。公家とッシ武家との間の町。地急ぐ跡よりホヲイヲイ。暫しと呼ぶに何用か誰人かはと傍に乘物を立てさすれば。安倍の保名が草履取。與勘平息を切つて走りつき。詞一二町跡からちらりと目印。幸ひと頬桁の裂ける程聲かけたも。御所の首尾知らぬ故無禮は御免。此狀箱女中方お頼み申すとさし出す。地文と問くより飛立てど人目の有ればしと〳〵と。ホヲヽいつもながら與勘平太儀とばかり解く紐も。長地眞紅辛氣の思ひ川濡れ逢ふ中の玉章は。たまさかならで逢ふ事は。まれな所が戀の味。文繰返へし讀終り。誰そ臺すれ。ハイアイと乘物より硯取出しさし寄すれば。思ひを箍むる返し事お認めの。間がな隙がな笑ひ盛りが取卷いて。詞ほんに〳〵今日はマア好い所へ與勘平殿。それはさうといつぞは問はう聞かうと思うた。好い折から世間に變つた名はいくらも。地有るが中で此方の名は與勘平とは誰が付けた。旦那樣の物好か但しは此方の望みでか。わけの有りさうな名ぢやなうと。點頭合うて問ひかくれば與勘平居直つて。詞成程々々。

拙者が名には因縁由來故事來歴。輕々しうは申されぬ事なれど。問人が問人ちやお咄し申さう。元來拙者が名は勘平。旦那のお傍近く參る者幾人も有る中に。天道三寶の冥加にも叶つたか。此通り無骨の身共兎角保名様のお氣に入り。身におつしやる事はお詞付が格別。如何してくれいよ勘平斯うしてくれいよ勘平。肩打てよ勘平。足さすれよ勘平などと。よ勘平よ勘平と仰がついにいつとなく。與勘平與勘平と人も呼ぶ。我も亦惡勘平と言ふよりまし。忝くも尊くも。拙者が與の字は主君よりの拜領。勘平に與の字の取付いた始り。あら〳〵かくの如くぞと語れば皆々打笑ひ。何咄さしても。口輕氣さくお主の氣に入る與勘平殿。奉公する身のあやかり者。アレ 地お乘物から召しまする。詞ナイない〳〵とさし寄れば。榊の前面羞げに。コレ保名様への御返し委しき事は此文箱。隨分早う御出を。頼む頼むと此方も歸り取急ぐ折からどつと一しきり。ナホス土砂ぐるめ吹く風に。保名の文も卷込んで。空に飄ひひら〳〵ひら。比良や横川の方より吹く天狗風とは知られたり。地榊の前も氣の毒がり。なう與勘平。アレ〳〵文は西へ〳〵と行く程に。歸りがけに落ちつく所。見居けて取つてたも。人手に渡れば互の大事其方に頼んだ預けた。兎や角と隙が入る。ア、心せかれや乘物急げと仰より。六尺七尺一またげ飛ぶが如くに行き過ぐる。地跡につゝぽり與勘平 狀箱持つて呆れ顔。エ、減法な當途もない闇の夜に烏追ふやうな預り物。ヤアしたが風もしづまる。そろ〳〵と狀殿が下らるゝ。エ、まさくお主の氣に入る與勘平殿。奉公する身のあやかり者。アレ 地お乘物から召しまする。詞ナイない〳〵とさし寄れば。榊の前面羞げに。コレ保名様への御返し委しき事は此文箱。隨分早う御出を。頼むと此方も歸り取急ぐ折からどつと一しきり。ナホス土砂ぐるめ吹く風に。保名の文も卷込んで。空に飄ひひら〳〵ひら。比良や横川の方より吹く天狗風とは知られたり。地榊の前も氣の毒がり。なう與勘平。アレ〳〵文は西へ〳〵と行く程に。歸りがけに落ちつく所。見居けて取つてたも。人手に渡れば互の大事其方に頼んだ預けた。兎や角と隙が入る。ア、心せかれや乘物急げと仰より。六尺七尺一またげ飛ぶが如くに行き過ぐる。地跡につゝぽり與勘平 狀箱持つて呆れ顔。エ、減法な當途もない闇の夜に烏追ふやうな預り物。ヤアしたが風もしづまる。そろ〳〵と狀殿が下らるゝ。エ、まさくお主の氣に入る與勘平殿。奉公する身のあやかり者。アレ 地お乘物から召しまする。詞ナイない〳〵とさし寄れば。榊の前面羞げに。コレ保名様への御返し委

うて三尺尋ね行く。水上清き片淵や加茂の氏人保憲の館。保憲死去の其後は。姫の養育髪切りて後室殿と內外の人の敬ひ持てはやしに憑こる惡事ぞうたてけれ。地中の間に立出で腰元々々と呼びわめき。詞エ、何奴を見ても居眠りたさうな顔付。榊は部屋にか上樣へ上つたを。大きな顔で靈寐して居ぬか。地皆手々に棒でも持つてさすり起せ撫起せと眞綿に針を包む折から地當家の執權人の皮きた乾平馬。お傍近く手をつかへ。詞御舍兄治部大輔樣。密々の御用とて御出でなされ候と。地いふ程もなく岩倉治部大輔國行。のつさのさばり上座につき。詞後室今朝の御所の首尾。姫が話聞き召さつたで有らうの。それにつき密々言ひたき事有つて。左近太郎と言合せの刻限を待たず此通り。地先づ是をお見やれと懐中の一通取出し。平馬も見よと投げやれうて三尺尋ね行く。水上清き片淵や加茂の氏人保憲の館。保憲死去の其後は。姫の養育髪切りて後室殿と內外の人の敬ひ持てはやしに憑こる惡事ぞうたてけれ。地中の間に立出で腰元々々と呼びわめき。詞エ、何奴を見ても居眠りたさうな顔付。榊は部屋にか上樣へ上つたを。大きな顔で靈寐して居ぬか。地皆手々に棒でも持つてさすり起せ撫起せと眞綿に針を包む折から地當家の執權人の皮きた乾平馬。お傍近く手をつかへ。詞御舍兄治部大輔樣。密々の御用とて御出でなされ候と。地いふ程もなく岩倉治部大輔國行。のつさのさばり上座につき。詞後室今朝の御所の首尾。姫が話聞き召さつたで有らうの。それにつき密々言ひたき事有つて。左近太郎と言合せの刻限を待たず此通り。地先づ是をお見やれと懐中の一通取出し。平馬も見よと投げやれ

ば後室取上げ押開き。詞ハア是は正しう保名が筆姫が方へ來た文是が何うして手には入つた。されば〳〵某も何となく。不圖眺むる庭の松が枝に何やらぴらつく。又町の子供め等が紙嵐落せしかと氣をつくれば此文。今日櫻木の親王樣如何仰出され候や。心許なく後程密かに參り承り度存上候と。地文に仔細はなけれども元來御闚といふ物が。ふり物の危な物萬一保名に闚が上つては。此方は童の手を切つたるも同然。どうぞ左近太郎と立合はぬ内此方へせしめる思案は有るまいか妹。平馬も智慧を出せ〳〵とフシ氣を焦立のせはしなし。地後室騷ぐ色もなく。詞かね〴〵お知りなされた通り。此金烏玉兎集の事は。夫保憲殿存生の内日を選み。地安倍の保名に讓り娘に娶合せ名跡を繼がせんと。吉日を待つ内に煩ひつきお果てなされた。まそつとの所を運の弱い。不仕合な安倍の保名。詞此方や私は蘆屋の兵衛に讓受けさせたいと思うた樣に。大事の所を遁れた上々の強い運。富でも御闚でも當るに氣遣はなけれども。廻らうよりは近道と兵馬と内證牒し合せ。明けにくい寶殿の扉や箱。地明けたが思案落ちついて下されと。篋籃内傳の玉兎集治部に渡せば喫驚し。詞是はどうして取出した。尤も扉の鍵は其方が預りなれども。箱の鍵は娘が預り豫かね聞く。大事にかけ肌身を放さぬサア其放さぬを智略にて。地盗人の隙は有れど守袋も寐る内は枕元へ忍び。鍵の寸法うつし取り拵へし此合鍵ハヽア詞したり〳〵。さすが治部が妹程有る。地出來た〳〵有難し忝しと押戴き。此書を道滿にやればあれも出世此方も出世。出世だらけ好い事だらけ此狀こそ幸ひ。保名めを盗人にする仕樣も有らう甘い〳〵と悦べば。詞其甘いを肴に御酒一つ參らぬか。それは耳寄兎も角もと地馬の合うたる平馬が案内。人喰ひ馬に間の戸をフシ引立てゝこそ入りにけれ。地榊は我が使ふ腰元を誘ひサアよい隙と部屋を出で。詞もう刻限は何時ぞ。言はずとも氣をつけて小鳥ども此處へなぜ出さぬ。イヤ申し御姫樣。今日はお前のお心は小鳥どころぢやどざんすまいがな。今朝の御所樣のお詞。千に一つ御闚が道滿殿へ上つたら。如何せうと思召します。サア夫れ故早うお出でなされと文をやつたれば。もう見えるに間は有るまい。お出でを知らせのお鷹の爲。直せといふ小鳥籠。地小言いはずと早う並べい。あいと手々に持運ぶ飼うて心の慰みと。人に見するはフシ駕よ。フシ二人が仲の。語らひは。末長かれと尾長鳥。長地朝夕爰に置きまして見つ見せたさの顏佳鳥それ其鶏は伯父樣の。祕藏せよとて賜はりし。若

し保名様氣が外れたら。胸のひたきと氣がついて見るもいや〳〵捨てはならず。遠のけてそちらに置けと得手勝手フシハズミ笑ふロ々囀る鳥。地蘗高塀の外面には忍び來る安倍の保名參議好古にみやづかへ餘勢有る身に有らねども。先祖は遣唐使に選ばれ唐土にて日本の名を揚げし。昔思ふも身の恥と編笠深く顏隱しフシ忍びて爰に立寄れば。地御供の興勘平鈴付けし小鷹を手にする。走着き。詞お旦那あれあれ小鳥どもが轉る。榊樣お出でを待兼と聞えた。此方もお鷹を使に知らせんと。地拳を放せば飛上り戻り羽もちり羽毛を振ひ。鳥の音に眼を付け籠をむんずと攫んだり。ヤレ詞お出でなされた知らせの鳥嬉しや〳〵腰元ども。地鷹を與勘平に渡し小鳥ども片付きやと。庭にかけおり裏門ロ明けて招けば首肯いて。入ると締合ふ手の内にフシ色と思を含ませり。地與勘平鷹をする。コレ腰元中。詞拙者は人目有り歸れと旦那の仰せ罷り歸る。コリヤ鷹よ今日も亦虛ロ空腹でかへるな。世間の譬とは違うて何時來ても〳〵。地鷹骨折つて旦那の餌食。堪へ情の好い鷹めでは有るわいとフシ小踊してぞ歸りける。地榊さゝやき御所の首尾は最前文で申す通り。詞御闇といふ物は天道次第運次第。心に任せぬ神の掟。言出せば愚痴なと叱らしやんすれど。父樣まあ一年生きてござれば夫婦にもなり。書物もお讓りなさる所を御往生。地運の弱いお前なれば。今日の御闇も私が心には上る迄も氣遣で。胸の躍をコレ見さしやんせ。賴むは大元尊神吒枳尼天。早う呼寄せまして禱り祈念もさせませたく。詞左近太郎樣はまだ見えぬに。伯父御は疾うから來て奥に酒宴。一倍と心が早う お顏が見たかつた。地サア一心に祈誓をかけおまへに御闇の上るやうに。共に祈念は怠らぬとフシ力をつくるぞわりなけれ。詞ヲ、馴染なればこそ添い。我も文を見るより御闇の善惡。直に生死と定めしが言やるを聞けばさうでもない。地信有れば德有り神は正直の頭にやどる。力を添へてたべ隨分神慮を仰ぐべし。といふものゝ烏帽子裃もかけずして。此平服恐れ有り何とせう。詞幸ひ父上の素袍烏帽子。私が部屋に有る取つてこい。地あいと急げば急ぐたけ行くより早く持つてくる。詞ヲ、實に〳〵目馴し師匠の素袍烏帽子。今日着するといふは吉左右々々。地冥加あれ保憲公と押戴き〳〵。着せんとする所へあたふた奥へ行く女。詞何ぞと問へば左近太郎のお出故。地知らせましにと走り行く御傍輩の中ながら。見付けられては事やかまし小枝が部屋が好い所。いざ此方へと打連れてオクリ裝束へ取持ち入りに

ける。地好古の執權左近太郎照綱案内させて座敷に通れば。治部大輔後室神乾平馬恭しく。八くらの机に御闔を乘せ兩人の中に据ゑ置きてフシ透にしさつて畏る。詞是は〳〵照綱殿御同道と存じたれども老足のはか行かず。却つて御面倒とそろそろお先へ參つた。親王の仰とは申しながら遠所の所御苦勞千萬。是は保憲が後家御存じの通り拙者が妹。次は神お見知りなされて下されう。いかさま御母子共に名は承り及んだれどもお目にかゝるは始めて。申さば今日は保憲殿遺跡の定りさぞお悦びなされう。ヤ何治部殿。御闔の次第を日の中に親王へ申上ぐる爲なれば。御支度能くばいさ御闔をお取りなされまいか。イヤ先づお待ちなされ。仰の如く今日は名跡の相續。未來の保憲もさぞ大悦。とてもの事に彼の金烏玉兎集を取出し。神前に供へ置き其前にて御闔を取らば。保憲直に讓る心。先づ書を先へ取出しては如何ござらう。それは兎も角御勝手次第。アレ後室。左近太郎殿も御同心。扉を開くはそなたの役早う〳〵と有りければ。地母は清めのから手水注連繩ほどき立寄つて。海老錠ぴんと扉を開きコレ神。詞扉は開いた中の箱は和女の預り。錠明けて書を取出し御神前にお供へ申しや。地あいと答へてしと〳〵と歩むとすれど氣は空に。口は經やら祓やら只一時に一生の。年を寄せたる浦島が明けて悔しき箱とも知らず。畏れみ慎み取出し二人の中に据置き。鑰にて開く箱の内。見るよりはつと驚けり。後室素知らぬ風情にて。コレ詞何をうじ〳〵してゐやる。御兩所のお待兼ね早う爰へ持つておぢや。アレまだいの俺にばかり物言はせ默つて居るどころぢや有まい。地合點が行かぬと立寄つてヤアこりやどうぢや。大切な家の秘書此内にござらぬと。聞いて驚く左近太郎ほつとフシ溜息吐くばかり。地治部大輔聲あらゝげ。詞ヤア後室無いと言うて事が濟むか。兩人は鍵預り外に知らう者がない。詮議して身の垢脱け。左近も是にお居やれば兄弟とて容赦はならぬ。地一卷の在り所いはねば骨を拉いで言はす。何と〳〵と仕組の詞後室神が膝引き寄せ。詞コレ今のを聞きやつたか。現在おれが兄弟でも容赦のならぬお上沙汰。其方とても其通り娘の遠慮成りませぬ。サア誰に盗んでやりやつたぞ。是は母様のお詞とも覺えぬ。わしが盗んで誰にやろ。イヤ遣りたがる其相手も此母が睨んで置いた。たけ〴〵しう言やつても盗んだは慥か〳〵いやとはいはさぬ。肝心締りの中の鍵は其方の役。假令外におろした錠の合鍵はいつでも仕易い。大膽な合鍵して能うも目を拔いた

なア。地あり様に言はぬと骨をぽき〳〵折つて言はす。サア吐かせ出しをれと腕まくりする氣相に。榊はとかう泣くばかりスエテ差俯向いて答なし。詞ヤア後室手ぬるし〳〵。引括つて鴨居へ吊り上げ。白狀さするは治部が得物。地其處退かれよとひしめく所へ。榊が部屋より平馬が高聲同類を捕へしと。保名が胸ぐら引立る是は雌題狼藉たり。放せ〳〵も放さばこそ烏帽子素袍も引きしやなぐり。座敷へどうど打据れば榊ははつと胸塞がり。左近太郎も一座の手前顏色變つて。詞コレ保名。變つた所で對面致す。今日を何時と心得て此所へは如何して來た。忝くも櫻木の親王。保憲が跡目相續の御差圖。蘆屋兵衛安倍の保名。伽藍籤の闇に任せ秘書相傳は時の運。弟子と弟子との立合は後日の心よからじと。御賢慮をめぐらされ治部殿と某二人が名代。左近太郎が闇取氣遣ひで和殿は來たか。地親王の御下知背くといひ主人小野の好古卿。顏まで汚す不屆者サア言譯せねば左近が立たぬ。性根定めて返答あれと理の當然に差付けて。言譯ならぬ身の誤り。ッシ戀に心をくるしめり。地治部大輔せゝら笑ひ。詞保名のどろめと道滿と同日にいふも勿體ない。さすが治部が掣程有つて。潔白に身を守り。こんな所へ出しやばらねば盗人といはるゝ恥もかゝす。自然と極る師匠の後繼闇取も絲瓜も入らない。ヤコレ後室誰に遠慮してお居やる。どれやい女郎を詮議して卷物を渡されよと。地己が盗み取りながら人を虐げる慾面兄弟。後室保名が襟首摑み引伏せれば榊の前。これなう暫しと寄る所をエ、面倒な邪魔女郎と。詞を片手に二人を捻付け。詞ヤイ恩知らずの罪人めら。師匠といひ親といひ目を拔いて腐り合ふ罰の報は早い物。エおれが產んだら斯うは有るまい。元をいへば和泉の國信太の庄司に貰うた娘。生さぬ中と分け隔て繼子根性親くらひ。日頃可愛がる此母を能う皮にしをつたなア。汝は又過行かれた師匠の名乘の一字を貰ひ。ホ、結構なお弟子殿。死なれた夫を譏るぢやないが。娘に甘い阿房故。修羅の種を造らする。エ、地憎くい奴輩腹癒せにと。名殘情もあら拳。目鼻も分かず打伏せしは。地獄の呵責目前。閻魔王に親有らば。ッシお袋なんどと謂ひつべし。地榊は涙せきあへず恥かしき御疑ひ。小い時より御世話になり實の親より百倍の。御恩をあだに思はねど圖らぬ今の憂き難儀。保名樣に科はない盗まぬ知らぬ言譯には。此身一つを鬼も角もお心晴らして給はれと。ハッフシ泣きわぶ。るこそ切なけれ。詞ア、コレ御身の言譯には及ばぬ。來るまじき此所へ參りたる保名が不運。

覺えなき身の打擲も師匠の連合手向ひならず。好古卿への面晴保名が家名は汚るるとも。地五臓六腑は汚れぬ腸引出して申譯。介錯頼む左近殿と。指添ずはと拔き放す。其手にすがつて榊の前双物もぎ取り南無阿彌陀と。喉にがはと突立つるコハ早まつた生害やと。保名は仰天照綱もフシ呆れ。果てたるばかりなり。ハルフシ手負は苦しき氣を取直し早まりしとは愚かの仰。よしなき戀につながれて言譯たゝぬ御切腹。そもやおくれてフシあられうか。詞母様も伯父様も御不承ながら聞いてたべ。弟子の中にも保名様。氏といひ器用といひ。そちと娶合し末々はと。の給ひし事もあつた故。地父のお詞に甘えてお二人の。目顏盗みし母の罰。天罰といふ物にや御所を歸りの道すがら。お前から賜ひし文俄風に取られしも。今別れんとの知らせかや玉兎集の行方も。推量はしつれどもどうも。〳〵言はれぬ相手。清き心は天道や神佛を證據にして。死んで行く身が言譯名殘惜しの保名様。左近様頼み上げますと聲も涙もせり詰めし。此世の苦患四苦八苦双の氷名殘の霜フシ消えてはかなくなりにけり。地保名は死骸に縋りつきスエテ前後不覺歎きしが。元來正直つきつめたる胸に思の氣も散亂。むつくと起きてホ、ホ、ホ、ハ、、、、こりや目出度いどうも言へぬ。ハ、、、、、、ア、地面白いと正氣失ふ高笑ひ。左近興覺めコレ保名。詞照綱ぢやが覺えて居るか心を定め取直せと。地制すれば猶きよろきよろ聲。詞よしや世の中死んだがましかいの。生きて思をコリヤよい〳〵。へへ、、ハ、、、地げら〳〵笑ひに一座もうろ〳〵。治部大輔底氣味悪く立つしほなければ佛頂面。詞エ、一人はくたばる一人は達ふ。狂氣の守は左近太郎詮議して歸られよと。地行くを引きとめヤアこれ詮議が殘り申した。詞事相濟む迄先づ待たれよ。イヤ其許は若役老人が儀は御容赦。はれやれ今日はびつくりの仕續け。それ故か腹もがつくり。地年寄と紙袋は入れにや立てらぬ。内へ往んで入れませうと盗み取つたる卷物をフシ腹にかこつけ立歸る。ハ、ア詞往ぬるは〳〵。おれも往の。ヤ何ぢや。一人は往なさぬ。何のいとしい和女を置いて一人は行かぬ。地サア地おやぢや立たしよと榊が桂褄花摺衣。菊のしげ縫亂菊の亂心やフシ亂髪。地肩に打ちかけくる〳〵〳〵。狂ひ出づるをコリヤやらぬと。留むる平馬を蹈み飛ばし縋る後室取つて投げ。撲り退け打ち退け。戀に苦しむ戀の仇。戀しき人は殺されても。戀々妻のこい仲は何の離りよぞシヤ。ほんにエ天は非々相。非相比翼の鳥のくちゞ〳〵。地は又奈落の底も離れ

ぬ連理の榊。榊々と逆上る。狂人狂へば不狂人。左近太郎が止むる袖振り切り振り切り狂ひ行き ㌫ 戀路に迷ふぞはかなけれ。地乾平馬仕濟し顔。詞佛もない堂にどざらずと左近殿もお歸りと。詞いはせも果てず飛びかゝり。素首捕へ筋斗打たす。後宝猛ってこりや狼藉どう仕やる。ヤア 詞狼藉とはおのればら。盜人の化顯はれた是を見れと差しつくる。ム、それは榊が預つた箱の鍵。ホ、榊が鍵はも一つこゝに有る。盜人婆めが立廻ふ内落しをつた此合鍵。よう榊を殺したなア。地主從共に猿繋ぎ御所へ引く腕廻せと。睨めつけられて二人はわな〳〵。逃支度する所へ息を切つて與勘平。ヤア 詞奴來たか〳〵。ない〳〵内證寡所で女中に聞いた憎くい婆め。保名様の御名代彼奴は拙者に下さりませ。ヲ、地鬼も角もと拔放せば平馬も遁れぬ死物狂。二打三打かなはじと奥を指して逃げて行く。婆が首筋奴が片手ぎやつと言はずとにやんとなけ。猫股婆めが成敗はこれよ〳〵此注連繩。明けた扉の上にかた〴〵引つぽどき。首に纏へば跳廻る。のら猫古猫する〳〵畏。繩先左の手にからまき。ちよいと引けば七顆八倒ぐつと引けば目玉もぐつと。拔いて取つたる一卷の報は目の前悶き死 ㌫ 心地よかりし有樣なり。地左近太郎は平馬を追つつめちやうど打つたる太刀影に。首は飛んで骸は乾猫と並んで死してげり。詞コリヤ〳〵奴。保名に早く追付いて仔細を語らば正氣に成るべし急げ急げ。ない〳〵と地別るゝ跡へばら〳〵ばら。取まく下郎うんさいめら。薙立て切伏せ殘黨ども ㌫ むら〳〵はつと追散し。地心しづかに刀を納め。出で行く武士に仁義有り。奴に過ぎた忠義あり。歸りし伯父に詮義有り。死したる娘に不義あれど戀にはゆるし有明の月の都に照綱が武勇の。譽ぞ世に高き

第二

大いなる者の己を立つるは奢の基。此字を分くれば一人の者と訓ず。岩倉治部大輔主君左大將の仰を蒙り。保憲が秘書を首尾よく奪ひ。己が館に預りおき ㌫ 邪智を廻す折こそあれ。地豫て密事の相談には河内の國の鄕侍。石川惡右衛門角前髪の部屋住なれども。惡に馴れたる强氣の若者招きに應じ入り來たる。跡に續いて蘆屋の兵衛道滿。男の館案内に及ばず。一間へ通れば治部大輔出で迎ひ。詞よくぞ〳〵兩人。今日は左大將殿諸共密々の相談なれども。主人は大内の御用によつて御不參。某が諸事承つて申談ずる仔細有り。サア〳〵地是へお通りやれと。挨拶すれば惡右衛門。遠慮もなく上座に直

り。詞コレ〳〵道滿殿堅い〳〵。聟舅の禮義は常斯樣の時の相談は。額と額すり合さねば談合がをへかぬる。但しお手を取申さうか。地如何にも御意に任さん御免あれと三人鐵輪に膝組合せ治部大輔小聲に成り。詞扨かねぐ〳〵もいふ通り。保憲が家の秘書。金烏玉兎集。道滿保名兩人の弟子の中へ。神慮に任せ彼書を讓り。天文陰陽の兩道を繼がせよとの御事。地萬一保名に彼書が渡らば。好古はよからうが此方の旦那は大望叶はず。聟道滿の殘念も推量せしにサア智惠も有れば有る物。詞妹後宝が合鍵の働で首尾能く奪ひ。榊が淫奔の文を拾ひ保名に惡事をぐわらりと塗りしが。地不便は妹の後室人手にかゝり相果て。姪榊の前も其夜に。自害と聞いて道滿もフシはつと驚くばかりなり。地惡右衛門しやらりいで。詞エ、知れた保名が所爲。治部殿詮議なされぬか。ヲ、身どもも左樣は思へども。彼奴もそれより行方知れず。此詮議も打捨置く。捨置かれぬは奪ひ取つたる玉兎集。早速主從打寄り内證で讀んで見ても。地ちんぶんかんにて合點行かず。其方とくと此書をそらんじ天が下の大卜師となり主君の望叶へよと件の秘書を取出し。渡せば道滿飛びしさり恭々しく手に捧げ。日頃の願今日成就是も偏に主君の厚恩。忝しと紐をとく〳〵押開き。一々に拜見し横手を打ち。詞ハ、ハ保憲の惜まれたるも道理々々。荊山の伯道が傳へし。天地陰陽の數。曆算推歩の術迄も掌を指すが如しと。地押戴き押戴けば惡右衛門肝を潰し。扨も妙かな見人に見せれば又格別。あかりをはしる蘆屋殿とフシたり顏に悅ぶにぞ。地治部大輔笑壺に入り。詞早速ながら尋ねうは。主君の御息女御息所櫻木の親王の御胤を。御懷胎の樣子もなし。地何と其術も有るならば。一行聽きたしときほひかゝれば。詞ヲ、積善の術は行ひやすし。毛色白き女狐の生血を取り。御息所の寢所の下陽に向うて土中に埋み。陀枳尼の法を行へば。地若宮懷胎疑ひなしと。聞くに悅ぶ治部大輔出來た〳〵。詞イヤ出來は出來たがなんと惡右。狐の才覺如何せうぞ。地それは氣遣ひなさるな主君の領分石川郡。其外五畿内狩廻さば白狐の五疋や十疋は。手の中に覺えが有る。それならば御懷胎は案の中爰に一つの難義は。詞六の君親王の御寵愛他に越えたれば。自然彼奴が先へ孕むと。外戚の權威好古に取られ主人は有つてなかし物。所詮邪魔は彼の女郎さい奪ひ取らうと思へども。大内の守り嚴しく盜み出すに時節なし。彼の俗說に蛙の背に思ふ人の名を書いて。地敷居の内へ投り込めば必ず出るといふ事。古き書物で見た

る故。其法を行へども驚程も利かず。日頃流行る呼び出し病も六の君には取りつかず。たそやたその歌の徳にて。疫病の神も祟らぬは是がほんの臆病神。なんと彼の書に呼出す法はない事か。フシいかにいかにと問ひかくる。ヲ、有るとも〳〵。六の君をおびき出し其上の御思案聞きたし。されば奪ひおほせなば長う邪魔をひろがぬやうに。ぶち殺して了ふ合點。其術頼む聟殿と人の謂もしら髪の親父。共に腰押す悪右衛門さても妙計。殺すとは手短かな上分別とフシそゝりかゝれど。地返答もせず膝立直し。詞これは又舅殿の詞とも覺えず。主君は子故の闇に悪行を募らるゝとも。其處を鎮めるが執權の役。御息所御懐胎の祈禱ならば。非常の大赦か生けるを放つ善根こそ。地御願成就なるべきに是は正しく六の君に。非業の死をさせ罪に罪を重ぬる上は。七鬼神の責をうけ御懐胎存じも寄らず。天に口有り地に耳有り好古などへ聞えなば。安穏で置くべきか時には却つて不忠の至り。此謀計はフシ無用々々と言ひほぐせば。ヲ、詞汝が一言能く推せり。イヤ拙者はお爲を存じての諫言。イヤサ諫言だて措け〳〵。察する所好古が家來左近太郎に。お事が妹花町を嫁にやつたる故。一家の主と敬ひ六の君をかばふのか。ハテそれは舅殿の廻り氣。イヤサ疑ひ受くるも胸一つ骨折つて奪ひたる。地玉兎集も娘築羽根も取返し聟舅の縁を切る。お家の大事を妹に見換ゆる不所存左大將殿へ申上げ。今目に物見せると立つを引留めア、これ〳〵妹などが縁に引かれ不忠を存ずる道滿ならず。サアそれならば地只今術をおこなふか。フシなんと〳〵ときめ付くれば。地人の命を斷つ事は陰陽道の禁なれども。舅の疑念を晴らす爲とフシ硯引きよせ。呪咀の文を認め。詞此神符を六の君の住み給ふ北の門の礎より。三尺六寸四分去つて貼付くる。則ち三百六十四爻の占方此寸尺にとゞまる。北は坤の卦向うて貼るは乾の卦。これ陰陽交體天地未分の一つ。地迷ひ出づるに疑ひなし刻限は酉。奪ひ取るに利有りさりながら悪事千里。慎みが肝要々々何國で殺す御思案ぞ。ヲ、それはぬからぬ都放れし菩薩池は。究竟のはめ所底も知れぬ池水へ。石を括つてずぶ〳〵は何と〳〵。したり〳〵面白し其役は此悪右衛門。奪ひ取つて沈めにかけん。首尾よう仕果せなば。治部殿かねゞ〳〵頼み置く。詞伯父信太の庄司が所領某拜領仕り。彼が娘葛の葉を拙者が女房にくれる樣に。元方卿の權威にて仰付けられ下さるゝお執成頼むぞや。地成程治部が呑込んだ必ずぬかるな仕損ずなと。神符を渡せば受取り急な

所へ取交ぜて。媒人やら所領やら摑み頬張る鷲鵰。烏丸通櫻木の御所をさしてぞ三重三下り歌今日來ずは。明日は散り行く。餘所の風。仇なる花のナホス名にしおふ。地櫻木の親王御所の築地を洩れ出づる。フシ琴の音色も媚かし。地彼の櫻木の仇花を散らして除けんと入相の鐘を相圖に石川悪右衛門。刀ぼつ込み裾をきりゝと短夜に。急げば急く程絶間もなき人通り。見咎められじと或は現れ或は隱るゝ星明。ちらり〳〵とちらめくにぞフシ戀とや人も咎むらん。地上の町より小提燈ぶらぶら來る二人連。こりや叶はぬとかたへに忍べば立留り。詞何と出ぬぞや。出ぬとも〳〵。此方の目の出ぬのに彼方のよい目の多いので。フシ不斷一六するゑられいつのおりはか勝利を得ん。地今夜は往んで悄々と双六より寢たが勝ちと。呟き通れば エ、さいさき惡き奴輩と。行き過ぐる迄見送り〳〵。用意の神符取り出し立寄る後に又人聲。はつと驚き立退けば聲高高。歌名譽不思議な吸出し。疵癖や腫物に此膏藥を貼付くればフシ奇妙々々と蔓つて行く。辻占よしと縱横見廻し。人跡絶ゆれば。六の君の住み給ふ北の小門にイみ。道滿が教に任せ懐中の曲尺取出し。詞一尺二尺三尺六寸地こゝらが四分と。目分量に神符を貼付け。築地の陰に身を潜めフシ今や出づると待居たる。三下り上歌かこつ恨は皆まこと。絶えし。逢瀬の憂き中を。いつそ言はぬも。身一つのナホス物に誘はれ出づるとは。思ひがけなく六の君。裏の小門をそつと明け氣も空蟬の藻脱の殼。お傍の女中はそれぞとも知らず調べる琴の糸。三下り文を忍ぶのヤ私や大江山。いまだ合ナホス慣はぬ地徒歩跣足。フシ立ちやすらひておはします。地時分はよしと悪右衛門。築地の陰よりぬつと出づれば六の君。なう悲しやと聲立て給ふを引捕へ。おとぼね立てなと握拳を猿轡。してやつたりと引つかたげ菩薩が池へと三重へ急ぎ地行く石川や瀬見の小川を横ぎれに。息つぎあへず悪右衛門六の君を肩にかけ。目さすもしれぬ鞍馬口戀ならぬ欲の深見草。廿日田舎の月代も。東の山に酉さすフシそれを力の。目覺に。よく〳〵すかして菩薩池此處なんめりと。どつかと下せば氣も消え〳〵。こはそも誰なれば情なや。身に覺えもなき事に斯る憂目を見するぞや。スエナ赦してたべと泣給ふ。詞ハテめろ〳〵とやかましい。とち女郎にかゝつて此侍の形を見よ。都から此池へもゆつくりと一里半。徒歩荷持同然で肩も足も草臥果てた。暫く息をする間合掌して待つてをれ。地これ究竟の床几ごさめりと。道しるべの立石に腰をかくれば。なう武士ならば物の哀は知る筈。假

令如何様に成るとても厭はぬ。かう〳〵した入譯と滿足さして殺してたべ。詞ヲヲ汝が此世に長居をすれば。御息所の邪魔に成る故。此池へ沈めにかけて殺すのぢや。ヤア扨は御息所のいひつけでか。地妬み嫉妬は女の習ひ。とはいひながら殺さうと迄は思はぬに。エ、胴欲な惨いつれない人心とかつぱと伏して泣給ふを取つて引つぶせ。詞あまければつき上り面倒な悔言と。地あたりの石を拾ひあげ裾に括り袖捻込み押込むにぞ。なう悲しやと取りつき給ふ。糸より細き弱腕へし曲げ。やつとまかせと掴んで差上げ。池の深みを覗ふ折から。汀に茂る蘆原より。によつと非人の大男とんで出で。悪右衛門が弱腰さしつたりと蹴返せば。うんと反氣に反り返るを。又引つかづきどうどのめらせ。續け踏にぽん〳〵と。踏付けられても強氣者。よろぼひながら立上り。詞推參成る乞食めとしがみ付くを身をかはし。ずつと沈みさまたにかけ。地かる〳〵と引つかづき其處よ此處よと持廻り。青み切たる池水へフさんぶとこそは打込んだり。地水を喰うてあぶ〳〵と浮きぬ沈みぬ漂ふ間に。六の君の御手を引き塵打拂ひいざ。召し給へと脊中さし向け負ひ奉り。足に任せて逸散に行方。知らず三重へなりにけり。ハルフシ昔より爰に和泉の神籬や。信太の里に年經りて塵に交る宮柱。和光の影も明らけき是も神の誓とて。附々迄も當世の。地加賀菅笠を一様の鄙に見馴れぬ取形の。葛の葉姫と聞えしは。スエテ信太の庄司が深窓に。人と成りたる秘藏娘。心に深き立願の徒歩路拾うて神詣千早振袖襠も。都に稀な品形。フシ花も色にや耻ぢぬらん。地外珍しき女子ども。詞申し〳〵姫君様俄事のお供にて我々迄も氣晴し。地そもマア今日の産宮詣は何のお爲とほのめけば。詞ヲヲ語らねば知らぬも尤も。此頃は毎夜毎夜血筋に離るゝといふ心懸な夢見る故。都にまします姉榊の前様の身の上に。悲しい事は有るまいかとそれ故の神參り。皆も共々願籠してたも。地頼む〳〵と同胞をフシ思ふ心ぞ優しけれ。詞お前の其姉妹思ひ神も納受遊ばさいでは。それはてつきり逆夢庄司様の甥の殿。石川悪右衛門様といふひとり角力見る様な。憎てらしい前髪がお前にきつい惚れやう。お嫌ひなさるゝ程しこりかゝつて女房呼ばはり。地其悪右衛門様に放るゝと云ふ夢の告げ。お悦びなされませ。詞ヲ、能うこそ祝ひ直してたもつて嬉しい。あの人に思ひ切らるゝは此上もなき悦び。おつつけ父様母様もお出での筈。地それならば待合せ。御一所に御參詣。此間に散殘る花を御覽もお慰みと。手々に敷くや毛氈

の朱は都の唐錦。打混じたる女中の遊び皆々幕にぞ三度入りにける

小袖物ぐるひ

五三の小唄 繼よ繼。我中空になすな繼。繼風が。來ては引。袂にかい縺れ。ナホス詞 思ふ中をば吹きわくるあら。心なの嵐につれて。裏吹き返す形見の小袖。見るに思の增す故にこそ二人フシ狂はすれ。狂ふは誰そや。我はそも。安倍の保名が安からぬ。胸に逼りし數々より。何國をさしてヒロヒ和泉路に寄る邊の水も下ギン泡沫のハヅミ漂ふ姿亂れ髪素袍袴。踏みしだき浮かれ歩くぞ。フシたゞならね。○詞これ〳〵物問はう。若し其邊へ十八九の娘の袿襠裾で。しやなら〳〵と行かぬか。ヤア〳〵知らん。ヲヲ其尋ぬる人こそ。地二人紫陽美蓉の花の容顏姿は物か。フシ及びなき。ハルフシ吉野初瀨の。雲珠櫻。更科越路の月雪も。ながめははるか下照衣通。神の緣の榊とは。我が繼人のあだし名か。あだな契りに言いつ。いつ忘れうぞ。何時の春か思ひそる夜は。さはらぬ。物を。柳の糸の亂心ひ交したる言の葉をフシ思ひ。やるさへ悲めけり。ナホス詞ア、去年の何月幾日やらヲヲ小唄それよ。花の宴や。花の緣。寺々しけれ。小唄更け行く鐘別の鳥も。獨り寢

の。鐘撞く奴めは。憎やな。戀ひ〳〵て。まれに逢ふ夜は日の出る迄も。寐ようとすれど。まだ夜深きにごん〳〵〳〵。こん〳〵〳〵と。撞くにまた寐られず。二人ナホス地寐ぬ夜恨みのフシ旅の空。二上リ唄夜さの泊は何處が泊ぞ。草を敷寢の肱枕肱枕。獨り明かすぞ悲しけれ。〳〵。合葉越の〳〵幕のうち。昔戀しき面影や移香や。其面影に露ほども。○地似た人有らば教へてたべ。遠近人に物問はんヲウイ。△ヲウイ地とまねけば招く興勘平やうやうに走り着き。詞是は〳〵正體なき旦那の有樣。人の見る目も恥ぢ給ひ。地サアお歸りと諫め曙して引く手を拂ひ。○彼處に茂る榊の枝に。形見の小袖うちかけて。あれ〳〵〳〵。枝にゆかしき人は見えたり嬉れしやとて。攀上れば。榊の枝は身をとほし。愛着は胸を焦す。こはそも如何に淺ましやとフシせんかた涙に伏し沈む。△地こは情なき御有樣。心なき草木を焦れ給ふも迷の空目。○詞なに空目とは事をかしや。心あればこそ時をがたへずそれ其處に。△どれ。何處に。三下リ二人唄實君に逢ひたくば。信太なる社に歩を運びて。合七日なん〳〵七夜さ。籠らば御利生ましくあらたに。合戀しき人には逢ひも見もせめ中に殊更榊の枝に。ナホス地君が小袖をフシ打被せ被せて。○地まがふ方なき榊の前非情とは興勘平。△ナイ。〳〵。汝こそ草よ木よと。二人形見の小袖身に添へて。泣いつ笑ひつ種々にフシ狂ひ。亂るゝばかりなり。地始終幕の物見より。覗きみとれて葛の葉は賤しからざる都人。何故かゝる亂心と幕しぼらせて立出づれば。姫を見るより狂人はなうなつかしの榊の前と。抱き付かんと立ち寄るを附々の女押隔て。詞是是麁相せまいぞ。あなたに覺も無い事を滅相な氣違殿。地それ留めさつしやれ奴殿。詞いや留めてをりまするお氣遣ひなされますな。地語るも主人の恥なれども一通り聞いて下さりませ。詞手前の旦那が思人におくれ給ひ。それより正氣を取亂し御覽の如く物狂ひ。其戀人にあなたがとんと生寫し。直な目にさへ見違へるに亂心では尤もと御了簡。重々甘えたお願なれども焦るゝ人に似た姫君。地優しきお詞かけ給ひ染み易きは人心。自然狂氣も鎭まれば此上もなき慈悲心。お傍の女中お執成とスエナ餘儀なく頼めば葛の葉は。まだうら若き心より應へなければ腰元ども。詞姫君のお詞で。あの氣違ひが直るならばそれはきつい善根。地見れば見る程よい男戀故と聞きや女子の氣は。傾きやすき稻刈のいなには あらず葛の葉も。それがまああられもない。如何言うて好からうやらと恥かしながら立寄つ

て。詞戀しう思召す方がお果てなされて。狂氣とはおいとしぼやお笑止や。地世には又忘草も有る習ひ。お心を取直し最早お歸り遊ばせと。言へば保名も心鎭め。能く〳〵見れば榊ならず似たりと思ふ執着に。つれて心も正氣となり面目なげに差俯向き。スエテしばし答もなかりしが。地やう〳〵に顏を上げ。詞ヤイ與勘平。おれは正氣に成つたるぞ。ヤア地扨々嬉しや忝や。是も偏に彼方のお蔭。お禮〳〵と主從手を下げフシ悅ぶにぞ。地葛の葉も面はゆげに田舍育の自らが。ちよつとお詞かけたとてお心の治るとは。ホ、、、、ホ、ヲ、恥しと顏を赤め。詞早速ながらちとお尋ね申したいは其お小袖。自らが確に覺の有る模樣。今又仰やる榊とは。もし加茂の保憲樣のヲ、其娘の榊の前。詞ヤア そんなりや私が姉樣と聞くに保名も聞き及ぶ。信太の御息女葛の葉殿かこれは〳〵と驚きしが。拙者は榊の前と深う契りし安倍の保名と。地聞くに今更餘所ならぬ姉の噂に驚かれ。此頃悪しき夢の告は。榊樣の身の上か。お果てなされし入り譯を。スエテ聞かせてたべと取付けば。ヲ、聞きたきは尤もながら。爰は往還人目も有り。地幸ひの幕の内。委細あれにて咄し致さん。此上は妹御を榊と思ひ神かけてと。目許で知らせば詞さへ岩木ならねば葛の葉も。綻びやすき幕のかげ。フシ伴ひてこそ入りにける。地女子どもロ口に。詞猫に鰹の幕ばひり。假令姉聟なればこそ。手放してやられもする。先刻の樣に狂氣ならば。かんまへて油斷がならぬ。是れにつけても鬼角手柄は奴殿。地當座の氣轉で戀の亂心しづめるとは。家原の文殊も及ばぬ智恵。殊に名迄才覺らしい。可愛らしい男やと。脊中をとんと與勘平。旦那の狂氣このかたは可愛らしいに慾り果てた。なう嫌や勿體なやとオクヘ幕の〈小蔭へフシ逃込む折から。地信太の庄司夫婦連私領の内は氣散に。供人輕く娘を慕ひ是も社へ詣で來る。附々の女さし心得。地親旦那お二方御參詣と知らするにぞ。幕絞らせて葛の葉姫姉の小袖を打ちかけて。只其儘の榊の前と紛ふばかりの詰袖にてフシ思ひ有りげに立出る。地娘の目馴れぬ取形に心をつくれば申し母樣。詞此小袖見覺えてござりますか。どれどれと地能く〳〵見て是を知らいで好い物か。詞此母が若盛りに。物好みに縫はせた小袖形見に見よとて姉の榊に送りしが。地和女はどうして着て居ると父諸共に不審顏。詞されば此小袖につき。地悲しい咄を聞きましたとわつと叫べば父母も。心ならずとはいかに。樣子はいかにと問へど答も泣いて居て濟む事かと。夫婦苛てば保名見兼ねて幕の内よりずつと出で。

蘆屋道滿大内鑑

詞ヲ、御兩親の御不審尤も。拙者は加茂の保憲が末弟安倍の保名。御息女榊とはかねて夫婦の約束。御室の惡心にて家の秘書を餘人に奪ひ取られ。加茂の家斷絶といひ夫婦の義理に榊の前は其夜に自害某も無念骨髄に徹し夫より物狂はしく成り思はず當所をへめぐり。地各々に御目にかゝるも不思議の緣と。語れば母は聲を上げなう葛の葉。此頃の夢話。かほどにも合ふ物か。是も夢ともなれかしとスエテ身を投げ伏して泣き沈む。父はさすがにえ泣きもせず胸迄せぐる涙をとゞめ。詞扨は聞き及ぶ保名殿か。姉が此世に存へ居ばいかめしく聟舅の名乘合も致すべきに。地悲しき今日の對面老いて子に別るゝ程至つて悲しき物はなしと老の涙にッシ咽び入る。詞ヲ、御歎は尤もなれども。地葛の葉殿がましませば。姉とおぼして慰み給へ。詞只今申すは異な物なれども。榊におくれ世に便なき某。地何卒御赦しを蒙り妹御を。婦妻に申請けたき願と聞きもあへず。詞成程世間に有る習ひ。なれども一つの難儀は身どもが甥石川惡右衛門。葛の葉を望めども娘も嫌ひ殊に又。禮義知らずの惡黨者故返答もせず捨置けば。地急にあつとも申されず老の返事もするどけに。にべもしやらりも嵐に馨き貝鐘の音列卒鼓オクリ間近き。地森の方よりも年經る白狐の駈け來り。葛の葉保名が眞中へ。助けてくれとスエテ言はぬばかりに隱れ入る。詞フウよめた。今聞えし貝鐘は狐狩。飛鳥懷に入る時は獵人も是を取らず。地殊に白狐は妖物にて唐土にては阿紫と名づけ。我が朝にては專女御前。宇迦之御魂の神使にて惡を知り怨を報ふ畜類。助けてやらんと傍なる祠の扉押開き。抱き入るれば嬉しげにフシ四足を潜め屈み居る。地時に向ふの堤傳ひ眞黑になつて駈け來るは。紛ひもなき惡右衛門逢うては邪魔と幕へ保名は。フシ忍びゐる。地程なく石川惡右衛門人夫引連れ件の白狐を見失ひ。きよろ〳〵眼になつて馳せつき。詞是は〳〵伯父者人。一家さらへて花見か遊山か羨しい。拙者は左大將の仰を受け近國を狐狩。同じ御領を預つても此方は仕合せ。妻子を引連れ味をやらるゝさりながら。葛の葉を嫁に貰へば聟なり甥なり。舅の代りに二人前の働き氣遣ひ召るな。見つけた狐も取逃しぎえん惡う思ひしに。願ふ所の女房狩。今日一日は休みにして。連歸つて腰膝擦らせ。此間の草臥休め。葛の葉おぢやと立寄れば庄司中に立塞がり。詞下々の婚禮でも吉日を選むが身祝ひ。いかに一家なればとて娘も得心せぬ事を踏付けた仕かた彼にもとくと合點させ。其上の事と言ひもあへぬにア、措かれい。今度

に限らず嫁入の催促は度々なれども。膿んだ物が潰れたとも一言の返答せず。又ぬつくりと魅まうでや。もう左様々々は誑されぬ。逢うた時に笠脱げぢやそれ家來ども娘を引立て。畏つて列卒の者ばら〳〵と立ちかゝる。無躰はさせぬと支へる庄司夫婦をば。首筋摑んで尻居に捻ぢすゑ。滅法やたらに荒れ出すにぞ保名主從たまりかね。幕の内より飛んで出で葛の葉親子をッシ後にかこへば。詞ヤア汝は安倍の安名。フウ出來た。姉が死ばつた故妹をせゝりに來たか。地躰汝には詮議の有る奴好い所で出くはした。加茂の後室を殺したも慥に彼奴。それを引込む伯父は同罪。地信太の家を斷絶さして此悪右衛門が横領するサア。毛二才奴姫を渡せと押取りまく。詞いや身に覺えもない事をさまゞ〳〵とほざいたり。コリヤコリヤ奴爰は保名が請取つた汝は各御供せよ。隨分ぬかるな急げ〳〵。地畏つて親子を伴ひ立出づる遁さじ遣らじと悪右衛門。家來引連れ驅け出すをどこへ〳〵と立塞がり。詞伯父に手向ふ無道人悪右衛門とは能うつけた。サアならば通つて見よ。地いや面倒な蚊蜻蛉め。先づ彼奴からぶちのめせと一度にどつと寄る奴輩。取つては投げ〳〵對ふ奴を廂蹴上げ。雙方へかゝるを飛びちがへ刀の鍔にて素頭碎き。手をつくして働けども遂に大勢をりかさなり。手取り足取り四方へ引張り。上げつ下しつ子供遊の亥の子餅。二三度四五度もんどり打たせ。サア邪魔は拂うたり。葛の葉を奪ひ取れとッシ跡を慕うて追つかくる。地保名は五躰も碎くるばかり。手足も拉がれ目くるめき。苦しき息をほつと吐き。詞エ、汝悪右衛門。生けて歸さじ卑怯者。地返せ〳〵と立つてはどうど轉び。よろぼひ立つてはかつばと伏し。無念々々とはがみをなしッシ男泣きに。泣きけるが。地必定葛の葉も奪はれつらん。最早生きてかひなしと指添逆手に拔き放し。既に最期と見えける折から。何として遁れ來りけん葛の葉それと見るよりも走りつき。これ待つた早まるまいと聲かけられて振返り。詞此方は如何して來た事ぞ。兩親は怪我はないか。はて地親達は如何ならうともお前に心ひかされて。鎬の中を來た者を。見捨てゝ置いて死なうとは聞えませぬと嘶つにそ。地保名も始終を具に語り扨危き事かなと。互に抱き縋りあひッシわりなき妹脊となりにける。地かゝる所へ與勘平息を切つて馳歸り。詞各を御供して府中の邊迄送り屆け。主人の身の上心許なく。取つて返す道にて悪右衛門に出くはし。地暫く戰ふ其間にようも慕うて葛の葉樣。御心底屆きしと悅び勇む向ふより。

地又むら〳〵と悪右衛門 大勢引連れどつと返し。葛の葉を見るよりも扨こそ〳〵。詞推量にたがはぬ女が不所存。地保名主従討つて取り姫を奪へと下知すれば興勘平。詞最前手並は見せ置いたに性懲もなき有財餓鬼。此奴が引導にて爰で信太の土となれと。地わつと喚いて切つてかゝれば只一人に切立られ。皆來い〳〵とフシ跡をも見ずして逃げて行く。地保名夫婦は大きに悦び。詞あつぱれ手柄 奴殿長追は無用なり。彼奴等が逃ぐるも興勘平拙者が追はぬも興勘平。地御夫婦仲も興勘平是も偏に信太の神の御恵と。旦那を祝しフシカヽリ御出世を松の葉の。地ヲ、住吉に隣つたる。津の國安倍野は我が本國。暫くかしこに引籠り。時節を待たんと勇めども。立つ足さへもよろ〳〵〳〵と。風に揉るゝフシ柳の枝を。杖よ柱と葛の葉が。夫の手を引きいたはりて畦道細道まがひ道。石津川を打渡り。是より先は道もよし。西へ〳〵と入日に連れて行くもよし。人目忍ぶは夕暮よし彼よし是よし興勘平。夫婦を誘ひ津の國や安倍野を。さして急ぎける

第三

地鴻飛んで冥々 弋者なんぞ慕はんや。左大將橘の元方は櫻木の親王の御契り浅からぬ。六の君を失はんと菩薩が池の底深き。たくみも案に相違して御行方の知れざれば。我が身にかゝる後難をフシ恐れて心安からず。地家の雜掌早船主税。野袴に草鞋がけ庭上に畏り。詞菩薩が池の非人めが奪ひ取りし六の君。草をわけても尋ね出し御褒美に預らんと。洛中洛外は言ふに及ばず在々所々の非人小屋。野臥の乞食迄片端に責め問へども。それかと疑ふ手がかりも候はず。地察する所風をくらひ當地を去りしに疑なし。此上は京近き隣國を一吟味御所存如何と伺ひける。左大將黙然と打首肯き。詞ホヽウ抜目ない詮議の仕方さりながら。腕におぼえの悪右衛門池へぽつぱめ泥水を呑ませしは。非人ながらをこの奴。都に居ずは近江路か若狭丹波路五畿内殘らず。捜し出してよき一左右。早船と呼ぶ苗字も時に取つて幸先よし。頼むは汝わが主税よ。ハヽアお氣づかひ遊ばすなと。御意に乗出す早船主税フシ御前を立つて勇み行く。地小廣間の杉戸押開き。執權岩倉治部大輔聟をかけて これ〳〵主税。詞當もない他國の詮議遠道より近道に。此治部が老眼で睨みつけた詮議が有る此。筋道を糺す迄旅用意入らぬ物と。地主税は次へ岩倉が座敷へ通れば左大將。詞ヤア治部大輔只今の詞の端。何かは知らず近道とは聞かぬ先から心地好い。サア地近う寄つ

て其入譯。近う〳〵と主從が膝と膝とを突き合せ。此年迄狙ひ付けた心の的。百に一つも外さぬ眼力。六の君の隱れ家喫ぎ出した近道。あんまり近さに聞いてびつくり遊ばすな。外でもない御家來內拙者には現在の聟蘆屋兵衛道滿といふ鼻の先の近道。いや〳〵蘆屋親子は無二の忠臣。何を以て二心とはア、殿甘い〳〵。忠臣顏に得てはまる。夜前四つ過ぎ門を敲くは娘の筑羽根。夜中といひ徒步跣何故に歸りしと。樣子を聞けば女のおしきせ悋氣からの夫婦喧嘩。其悋氣の根元が某の見つけ所。蘆屋兵衛が屋敷には陰陽の守護神吒枳尼天を勸請。不淨穢を忌むといひ立て。家內の上下は勿論連添ふ女房も寄せつけぬ彼の吒枳尼天の圍の內。世を忍ぶ女の泣聲。それから起つた娘が悋氣詮議といふは爰の事。世を忍ぶ女とは疑ひもない六の君。主の仇を助け置く不所存者に娘は添はさぬ。他人となつて此治部が急度詮議仕ると。語るもよしや蘆屋が難儀。蟻の穴から堤の崩れ轉てかりける評議なり。左大將やゝ分別し。ホ、さすが老功丈もな目の着け所。殊に兵衛が妹は左近太郎照綱が女房。妹聟の主の命ムウ〳〵其處を思ひ助けなば。直に先へ渡す筈。我が屋敷に隱すとはムウいやこれ治部。誤つて疑へば人も我も共に亡ぶ。今一應思を押してと聞きも果てず。ホ、疑はしくば娘が咄。御前にて申させんとお次迄同道。なに筑羽根を同道とやそれは幸ひ。左大將が眼識をもつて祝言さした筑羽根。悋氣の肩を持つ顏で底叩かせて聞く胸と。主從うなづき呼びに立つ親の指圖に筑羽根が思の數やみなの川。戀ぞつもりて淵と讀むうたて悋氣の廻り緣過ぎて御前へ出でにける。コリヤ筑羽根。そちが身の上元方卿お聞きなされ。親が案ずる苦も助け仲直してくれんとな。有難く存じお禮申せ。いや〳〵禮に及ばぬ。主といふ名はあれど畢竟元方は媒妁役。夫婦間のもや〳〵是に限らず幾度も聞きうち。悋氣の起りをとつくりと聞き拔いて。揉める氣を休めてやらう何と嬉しいか。サア底意殘さず打明けて語れ聞かんと有りければ。是は〳〵有難いと申さうかおはもじと申さうか冥加ないお詞。高いも卑いも夫婦諍ひ。みす〳〵男が惡うても女房ならでは非に落ちぬ。其處を思ひやり給ふも御息所樣といふ。お獨の姫君を親王樣へ上げなされ。お仲の好いが好い上に若宮を出かしたい。どうか斯うかと思し召すお心から。私が事迄捨置かれず忝い御挨拶。お詞につきあがり緣聟もなう喋ると。お笑草も願ず。一から十迄申上げましよ。まあの兵衛道滿殿は嫁入せ

ぬ其先の。つつと前から目利して私が男に極札文玉章は數知れず。附けまい物か惚れまい物か。先づ第一器量が好うて痩もせずふとりもせず。男一疋武藝に勝れ奉公に私せず。歌を詠んで詩を作つて手も見事學はよし。地茶の湯立花扇の手打囃子は拔け物。詞まだ肝心の藝を落した。陰陽道は見通しの卜筮。地ほんに主の藝揃へ數へ立つれば讀骨牌七坊にあさつき。事の多い生粹男焦れ死のとした所を呼びいけた御媒人。それからは又嫁入を待つ程に〳〵小さい時正月を。待つたはいそ〳〵急ぐ月日に追付いて。嫁入したは一昨年の。詞ア、一昨年の。あんまりの嬉しさに忘れにくい月日をば。ヲ、此親が覺えてゐる。三月六日アイ其彌生々々。コリヤヤイ其彌生も好い程に取置け。前道が長過ぎて殿も親も退屈な。イヤ長うても退屈でも言はねば聞えぬ。あの草双紙の物語も。序文を聞かねば末の段が捌けぬ。御退屈にござしよが。祝言の口開お聞なされて下さんせ。三月は花の緣散りやすいといふ心で。取結びもせぬ月と人の思ふは誤り。地詩經といふ唐土の書に。桃の夭々たるその葉蓁々。この子爰に歸ぐと。堅い樣に聞ゆれど假名でいへばつい嫁入。其夜しん〳〵しつぽりと寐てからが猶好い男。こんな果報な目に逢ふも殿樣の皆お蔭と。閨へ入る度毎に御所の方を三度禮拜。有難いに氣がついて。詞此有難い囉梅を。腰元共がそびかうて配分さしてはなるまいと。地主の行かしやる所々跡から筑羽根鯨に鯱。行かれぬは勸請どころ女子は不淨近寄るなと。七里けんばい嫌はるゝ天女樣が氣ぶさゝに。或夜そつとさし足で立聞すれば呀く聲。詞扨はとくわつと氣が上つて。踏ん込んで穿鑿しよか。イヤ〳〵慥に見屆けてと。其夜はわざと色目に出さず。明の夜も亦明の夜もな。ムウ二度も三度も試してとは。辛抱づよい能う怺へた。此左大將なら堪忍えせまい。シテしてどうぢや。サア麻痺きらした代りには。神佛にかこつけて曖しくろめる妾のこそ部屋。しかも生若い女子のいたづらさうな舌つきで。地泣いつ口說いつ仕くさつたが堪へ袋の破れかぶれ。男の胸ぐら斯う摑んで。詞コリヤ娘俺ぢやわやい。イヤ俺とは言はさぬ。コリヤ手ひどい八月の風でそばが堪らぬ。ホ、ちつと堪るまい。能いぬけ〳〵と瞞しやつたの。サア此方の有難がりやそ。箱入の妾へ出しや。地遲いとおれがまくし出す。詞如何ぢや〳〵と振り廻され。詞これは親を如何するぞ。昨夕のを持越して悋氣の二日醉ぢやな。地性根も眼も覺して見よ御前ぢやが馬鹿者と。突き放されてサアそれ〳〵。

まつ其樣に脱みつけ。妾とは勿體ない。陀枳尼天を守護の爲八百八狐宿直の御番。疑ふな人ではない狐々と嘘八百。男のむごい氣になつたも妾めが爲する業。憎い無念な口惜しいと聲も心もせきのぼす。顏は上氣に目も血走り悋氣逆立つ悋氣の咄。咄かうじてあら涙。人目遠慮もないじやくり疊叩いつ身悶えし ㌫ 恨み歎くぞいぢらしゝ。地左大將治部に目配し。詞ホ、そちがのが皆道理。胸の屈托晴してやらう。ヤア誰か有る。蘆屋兵衞に急用有り只今參れと申して來い。早う〳〵と使を立て。コリヤ筑羽根。兵衞が來次第意見して裝束の間で盃さしよ。機嫌なほして奥へ行けと。地詞に上げて落さるゝ夫の難儀と歸知らず。はつと嬉しさ疊に額。筑羽根が身の一期忘れまい御情。父樣悦んで下さんせ外の挨拶千聲より。お上のたつた一聲が連合へ釘が利く。ほんに〳〵お主の光は厳しい物。親の光は七十の頭の兀た光ぢやと ㌫ ほほゑみ立つて奥へ行く。サア地邪魔も片付いた蘆屋が來るに間も有るまい。詞此治部が存ずるは。組手の者を隱し置き引括つて御穿鑿。ア、老人だけ息短かい。栲間は奥の手大剛不敵の蘆屋兵衞。麁忽の手向ひあぶな物。何事なげに氣をゆるさせ身が前へ引付け置き。留主へ廻つて岩倉はかれが屋敷の勸請所。ぶち毀つて詮議々々。ハア、あつぱれ〳〵御分別。地出來た〳〵と領く所へ。兵衞殿御出仕と呼ばはる聲に左大將。治部ぬかるなと ㌫ 言捨て。席を立ちにけり。地急御用氣づかはしと蘆屋兵衞道滿する〳〵と打通り。詞ヤア舅殿是に御入りかあわたゞしき御使御用筋氣づかはし。貴所には御存じ候はぬか。イヤ何事も承らず。そこの出仕召されなば裝束の間へ通せと有る。御用の筋は衣紋の儀かさなくばお好きの鞠の儀か。まあお目にかゝられよ。地然らば左樣と立ちけるがイヤ何者でござる。夜前女房筑羽根が何やら無性に腹を立て。イヤ是は内證先づ御前へ。地御用しまうて御意得たし ㌫ 後刻々々と入りにける。地しすましたりと治部大輔玄關へつつと出で。詞是々主税。暫時も急ぎの大切御用御召換への馬引かれよ。地承るといふ間もなく逸早雛に鞍置いて。引立て來るを引寄せて ㌫ 暇上御免と乘移れば。地つくばね奥より走り出で父樣やらぬと立塞がる。詞ヤア小さかゝい何故とめる。何故とは愚か樣子殘らず聞きました。お前を詮議にやつてはな。女房の口から訴人も同然夫へ立たぬ義が立たぬ。地娘の身にもなつて見て待つて下され待ち給へと。手を合すればから〳〵と笑ひ。詞夫とは誰を夫。戻つたれば緣は切れた。他

人の詮議に何吠え面。地其處立ち去らずは跡にかけんと乘出す馬の平首に。ひたと兩手をかけ聲もかよわき女の足踏みしめ。コハ引きとゞむればまた駈出す馬の三頭も子の身には。冥途の呵責と恐ろしき。父が邪見のうなり聲放せ。放さじ退け退かじと。命惜しまぬ筑羽根が。身は捨小船荒磯の波に揉まるゝ如くに。引いつ。引かれつはずみを取つて鐙の端。はたと當つれば反りかへり。あつと叫んで悶ゆる娘父は。勇みの鞭泥障打立てゝこそ三頭へ別れ行く。フシ隔つる中の。廬垣や。地蘆屋が屋敷一構陀枳尼天を勧請所。庭の新樹の蔭漏れて。入日眩き軒の端少オクリ中居茶の間がとりぐ〜に掃除は常と夕清め。しやんと仕舞うて詞ア、しんど。奥様がお留守なりや何處もむさいと言はれまいで。御奉公に氣が張る。それは左様よ此奥様。お里へふいとお歸りぢやが此仕舞は何うつくの。イヤ深う案じやんな。日頃お仲の好い御夫婦。一日二日は立つ腹もひとりと直るお一人寢。淋しさに呼びにやつた。戻りましたで濟もぞいなう。家になうてならぬ物は上り框と女房と世話にもいふぢやないかいなう。ほんにさうぢや。こちらも首尾よう奉公勤め。地相應な好い男の。上り框になりたいと オクリ口々。媚めくフシ折こそ有れ。地供被衣の介添も梨子地蒔きたる鋏乘物フシ式臺へ昇入るゝ。地それ何といはぬかのはや奥様のお歸りぢやと。さはめき寄つて戸を開けば。筑羽根ならで兵衛が妹。左近太郎照綱が妻の花町。身すぼらしげに立出づる。ヤアこりや奥様が違うたわと。開いたる口の乘物早はッシとつかは急ぎ歸りける。地女子ども袖引合ひいつものお里歸りとは違うて。附々もない裸乘物つつと持ちかけそして又。往にしなのひつしよなさ花町様のお顔持も。どうやら濟まぬ譯らしうてひよんな事ぢやと呟く聲。聞きはつつてお茶の間が。詞此方の奥様お歸りで淋しうて悪いに。代りに去られさんしたりや賑かになつて嬉しい。エ、こゝなはつさい地つか〜物をいやんなと叱るを聞くも身の辛さ花町が目は涙。詞ヲ、皆の推量に違はず。厭かぬ仲にも添はれぬ義理。夫左近太郎殿暇やるとの悲しい詞。我が身の上の歎より切なきは今の噂。地兄嫁の筑羽根様お里へとは氣の毒や。兄兵衛様はお屋敷にか。詞アイ旦那様は御前から呼びに來て。先程出仕なされました。父上も御一所にか。イ、エ。將監様は御隠居所にお休みなされてござります。地どれお知らせにと立つを引とめ是れなう。お氣休めの假寢起しませずとわしが往こ。したが常とは違ひ一人はどうやら。皆の衆力

に來てたもやと ッシしを〳〵として入りにける。地門前に轡の音喇く聲も高々と。左大將の仰を蒙り岩倉治部大輔國行。詮議有つて向ひしと股立ながらつつと通り。詞ヤア〳〵將監は何處に在る。罷出でよと權柄なり。地物に騒がぬ蘆屋將監しづ〳〵と立出で。ヤア詞治部殿何か詮議候とな。地近頃御大儀千萬といはせも果てずヤア落ちつき自慢笑止々々。詞詮議の筋は言ふに及ばず覺えがあろ。陀枳尼天の勸請所。地ぶち碎いて落ち着かせうと奥を目がけ驅け行けば。これ〳〵待たれよ暫し〳〵と引きとめ。詞ムウ此内を詮議とはエ、聞えた。加茂の保憲が家の秘書。金烏玉兎と名づけし奇の一卷。左大將の御下知にて悴兵衛が手に渡り。陰陽道を傳へつぐ家の重寶。さるによつて斯くの如く別殿を構へ納め置く。若しは他見も致さずか疎略にもして置くかと。お疑ひの吟味ならば御無用に遊ばせ。イヤサ治部が詮議は格別此内に女が在ると。筑羽根めが悟氣から聰たゝいて顯れた。其女とは六の君浮はずとも爰へ出せ。是は存じも寄らぬ事。嫁が言はうが誰が言はうが此方に覺えない。殊に陀枳尼は天部の荒神。穢れ不淨を忌み給へば悴が外は親をも入れず。地況して女性を此内にとは治部殿の氣のまはり。可愛げに何嫁が嘘をつくばね置かれい〳〵。ヤア覺えなくば戸を開け内を見せぬは臭い〳〵。詞イヤ明けてお目にかけたうても見らるゝ通り錠をおろし。鑰を悴が懐中致せば御苦勞ながら歸宅迄。ヲ、地其鑰治部が持參せしとずつと寄つて大の錠。老の拳の古力ヤアえいうんと一捻にさしも手强き鉦鐵物。ぽつきと劈けて飛びちつたり。地將監見るより岩倉が肩骨つかんで撥返し。尾籠なり治部大輔詞鑰で明くれば言分ないなぜ捻切つた。地年こそ寄つたれ蘆屋將監留主を預けし悴へ立たぬ。サア此内ハ爪先でも入れて見よと反うつて睨めつくる。詞ハ、、化の皮が剝げかゝるでやけと出てぴこつくか。捻切らうがぶち割らうが岩倉が私ならず。地左大將の御指圖使者を切る氣で反うつたか。詞主を切るかサア拔けと威光をかさにきめつけられ。主といふ字に打つ反の双も鈍り手も撓み ッシ息をつめて扣へ居る。ホホ地呂と左樣も有まいと圍の扉蹈み開き。駈入れば女性の聲わつと叫ぶを提げ出で。フシ大騙の生盜人コリヤ六の君を見て置けと。差付けられてハアはつと呆れしばかり詞なし。花町かくと見るよりも父が差換脇ばさみ走り寄つて是治部殿。詞六の君の御家來左近太郎照綱が女房捻へて居る厄病の神で敵とやら。そなたの詮義で姫君樣。思ひがけなう爰で逢ふは優

臺華の花町。サア尋常に渡しや〳〵。ヤアほざいたり引つさかれめ。うぬに渡してよい物か。地其處立ち去らずは眞二つと刀の柄に手をかくれば。花町も抜きかけて互にぎしむ眞中へ將監わけ入り押止め。詞花町は請取る氣治部殿は渡さぬ氣。爭ふ果は互の鋒先其姫に過有つては。お使者の越度爰が一つの了簡所。六の君是に御入りとは神もつて存ぜぬ某。見屆けられし上なれば我に預け置かるゝとも。越度にならず事にもならず。武士の義は他人より親子の仲が猶晴業。親にも隱す悴が心底尋ぬる迄預けられい。地コレ手を下る治部殿と詫ぶるも聞かずせゝら笑ひ。詞義のしやばるのと人らしい盜人の同類ならぬ〳〵。イヤ事を分けて言ひ聞かすに預けずは預けぬ迄。舌の根が伸び過ぎる奉公引いた隱居の身。地使者呼ばはりも二度とは赦さぬ言ひがかりなれば是非預かる。地ホ、成らば預かれと姫を弓手に脇挾み。馬手に刀抜放せば親も娘も抜合せ。切合ふ中に絶え〴〵の息も苦しき六の君。見る目はあ〳〵花町が打てば開き將監が。切つてかゝれば振りかへり戰ふ强氣劣らぬ勇氣。氣も夕陽の影滿く胸はときつく暮六つの。鐘の聲々六の君渡せ〳〵と追つつめ〳〵。切込む太刀筋人顔もノシおぼろ〳〵に見えわかず。地蘆屋兵衞道滿御所を下の歸り足。つつと寄つて岩倉が首筋摑んで狗投げフシころ〳〵ころび打つたりけり。地起きあがつてコリヤ道滿。詞何として今戻つた此治部が歸る迄。御前は立さぬ約束ぢやが。ムウ扨はぬつぺり言ひ抜けたな。サア其抜け樣の言へ聞かん。ホ、人を出し抜き。跡へ廻るぬつぺりは和主が事。御前をはやく退出せしは女房が嫉妬の間違ひ。事あらはれしと推量し心底包まず申上げ。地主人の手前さつぱりと埒明けたり。埒の明やう聞きたくば立歸つて主人に聞け。往にやうが遲ければ棺桶で送らすぞ。ホ、棺桶とは能う祝うたはかいきがして面白い。立歸つて又來る迄六の君預けたぞ。コリヤ詞つがうた覺えて居よとフシ跡をも見ずして逃げ歸る。地道滿は姫君のフシ塵打拂ひ。御手を取り座敷へ移し奉る。地將監道滿に打向ひ。詞櫻木の親王樣御龍愛の六の君。此頃見えさせ給はぬとて。御父好古卿の御愁傷。尋ぬる姫を隱し置き剩へ今のしだら。親にも知らさぬ汝が心底訝しと有りければ。地ハア御不審の段御尤も姫君をかくまひしは。左大將殿へ御忠節道滿が今日迄。胸にをさめし忠義の紐解。妹もそれにてフシ承れ。地淺ましや左大將殿官祿不足無きお身が。下々に劣つたる娘をあてに出世の望み。御息所御懷妊おそなはるも。六の君が有る故

殺してしまふに御思案一決。談合相手は次部大輔某を密に招き。陰陽龜卜の奇々妙々人を呼出す秘文を書かせ。築地の裏門北向の柱に貼り。六の君をそびき出し石川悪右衛門にいひつけ。菩薩が池にて失はんとの御企。地止めても承引なき主從凝つたる非道の悪念。六の君を殺したとて御懐妊あるべきにや。却つて人の恨の報ひ終には悪逆顯はれ。御身の滅亡遠からるまじ如何はせんと肺肝を苦しめ。詞所詮主人の望の如く御所はそびき出すとも。お命を失はずは後日の難儀は有るまじと。先へ廻つて菩薩が淵悪右衛門を池へ取つて投込み。六の君を助けたる其薦被は此道滿。地念なう助けッシ參らせしが。地父御の方へ戻しては主人の悪事顯はす道理。とやせん覺悟は咤枳尼の御殿。供物を以て今日迄養ひ申す我心は。詞主人を大事と思ふ故心體髪膚を分けられし。父にも知らさずか程迄忠義を盡す道滿が。心を無下になし給ふ曲もなき御主人やと忠義に熱き涙の色。父も感ずるばかりなり。地六の君涙ながら道滿の心づかひ。今日迄命ながらへしは情の上の罪科ぞや。たま〳〵女の道に叶ひ親王様のお添臥。厭かぬ契りを惜らしやおなじ都に在りながら。父母の御顔をも見る事かなはぬ世の中に。生けて思をさせんより殺してやいのと伏し沈みて歎き給へば花町も。御理やとフシばかりにて共に。袂をしぼりしが。地道滿重ねてヤア〳〵腰元ども。詞六の君様奥の亭へ伴ひ申し。御湯をひかせ奉りお髪もあげよ。地今宵は世間打晴れて御憂さ晴しに舞ひ謠ひ。夜とても慰め參らせよあいと一度にうは調子。お免しが出た流行唄一上り唄をぞや姫君様よりこちらが慰み。いざ御立ちとさゝめきにオクリ誘はれ。奥に入給ふ。地花町は跡見送りさつても嬉しい頼もしい。兄様のお心入れ。聞いてさらりと私が胸も打明けて申しませう。詞先程は父上にふつつり去られ戻りしと言うたには譯が有る。地照綱殿の暇の印是見給へと懐中より。取出し差寄すれば。詞ムウ是は只今言ひ聞かした。人を釣り出す秘文の神符。是を暇の印とは。サアそれを印といふ譯は。姫君の此間見えさせ給はぬ節の騒動。方々へ尋ねに行くやら神佛へ願立てやら地咀の祈禱のと狼狽へた上にまだ狼狽へ。猫のまじなひと取りちがへ。ほのぼのの歌を逆様に迄張つたれど。其秘文に氣のつかず。遥か後に見付出した照綱殿はさすが目高。是は噂に聞及ぶ陰陽の妙術。今此術を行はん者道滿より外にない。主人を失ふ敵の妹添ふ事ならぬ暇やる。とはいふ物の添ひたくば此印の詮議して兄が首切つて來い。アヽ長つた切つて來

うと請合うた私が此口。聞が當つて歪まぬが不思議ぢや。地何もかも兄がひに了簡して下さんして。六の君様お供すりや何處も彼所も納ります。父上も好い様にお詞添へて給はれと フシ思ひあまりし願ひなる。詞ヤアうつけ者六の君戻してよければ道満が疾う戻す。主人の悪名露顯を憚り心を碎くに氣がつかぬか。地ア、申し其處の所も知らぬでない。ハテ左大將様の悪事ぢやといひさへせねば。詞ヤア濟むと思ふな濟まぬ〳〵。汝も將監殿の子でないか。武士の祿をくひながら道満が詞なんと聞く。六の君に御湯をひかせお髪をあげよといったはな。此曉に御首をエイあなたをや。ヲ近ごろ痛はしくは存ずれど主命是非に及ばずと。地胸は涙に疊り聲。花町はつと氣も落ちて スエチとかう。答も泣居たる。地將監は兄弟の心を酌んで扣へしが。詞ヤア道満。左大將の御下知畏つたと請合うたか。成程々々顯はれし上は詮かたなく。先刻確に御前にてア、麁忽々々。六の君を失へば左大將のお身の大事と。忠節の九つ梯子八つ迄上り詰め。今一つをやり兼ねて御首を賜らんとはムウム聞えた。意見しても聞入れない主人にほつと愛相つかし。後日の罪科に遭ひ給ふを見物する分別な。コハ仰とも存ぜず。伍子胥は諫めて誅せられ。眼軍門にかけられしが。呉王の恥辱を見て笑ひしとや。地毛唐人の了簡と道満が心は格別。主の恥辱見物する望なし。首討つて御前へ差上げ其場を去らず切腹致す。詞ム、腹を切つて相果つれば主人の科が遁るゝぢやな。其方が腸蔦烏の爲にはならうが。主の爲には些とも成らず。娶を能う分別せよ。主命も背かず姫も殺さず事を治める仕様が有る。將監が思案には。六の君の首討つてお命が助けたい。ヤこれ親人。首討つて助けとはお詞が紛らはし。イヤサ紛らはしい事はない。六の君の首うつて。地助けよといふ事と。聞くより花町差寄つて。ア、願ふ所の御了簡御首うつて助けとは。此花町が恐れながら六の君の御名を借り。兄様の手にかゝれば兩家のお主へ忠義も立ち。死んだ後で連合に出かしをつたと譽られれば。それを未來で夫婦の樂。ヤイ道満此六の君を見違へなと 地詞姿もはや改め フシ思ひ切つたる覺悟の體。將監涙をはら〳〵と流し。花の中の黄鳥花ならずして香しとは。おことが事よ誠有る左近太郎に連添へば。心も剛に忠義を立てお命に代らんとは。出かしたりさりながら。詞おことも十人並なれど姫君には似もつかず。殊に目賢い左大將殿。請取られねば破れの本そちが望は叶はぬぞ。地そんなら外に誰人ぞ能う似た顔がございますか。詞有る

とも〳〵。外迄もない斯う並んだ中に有る。道満とがめて此中とはさし詰め妹花町より外にはなし。イヤある〳〵。億兆の人同じからずと雖も。似た顔も有れば有るもの。六の君の面容に寸分違はぬ其顔が。天地の間にたつた一つ。ムウ。どれ其一つは。ヲヽ六の君に能う似たは。地将監が此首とフシいふに驚く計なり。エエ地父上よつぽどな事おつしやれ。玉の様に透き通るお顔と。六十に餘つた皺だらけの白髪頭と。まだ其上に姫御前と男と若干と言はうか。お月様と泥龜ほど違うたお氣は上りはしませぬかえ。詞ホヽ違はぬ所をとくと聞け。兄は主命討たねばならず討たしては妹が立たず。中を取つて某六の君を連れて退く。すりや親とても見遁されず追つかけて道満が。将監を討つ間姫は遁れ落給はん。申譯には白髪の此首。右の樣子申しなば忠義に代へて親を討つ。二心なき道満左大将殿ぐつともいはれず。それなりけりに事は濟む。とゝろ兀た此首でも身代りになれば成り樣が有る物と。地一つの命を兄弟に。分けて忠義を立てさする親の慈悲こそ有難き。地道満はつと恐れ入り我々を御不便のあまり。お命を捨てんとは勿躰なや畏ろしゝ。詞道を守るは忠孝の只二つ妹が心底問ふに及ばず。不孝と呼ばれ忠義は立つまじ。地アイ兄樣さうでござんす。父上の仰でも此事ばかりは反かにやならぬ。ハテ兄弟は他人の始り他人に連添ふ花町。心々に忠義を立てる。ヲヽ出かした某とても其通幾たび仰有るとても。いつかな承引仕らぬと詞を放つて申しける。詞ムウ親の心を無下にして兄妹共に承引せぬな。ハア、殘念是非がない。道満が討たねば御前は濟ます。自害しては犬死はて何とせう役に立たぬ事いふ手間で。地經陀羅尼の一遍でも彼方のお爲と立つて行く。ロに隨求陀羅尼の文。ハラ〳〵サンバラインヂリヤ。親子の心もばら〳〵〳〵につれて三人其夜も。更け渡る。フシ月影暗き。植込の。裏の高塀枝さしてスエナ茂りし松の音するは。ギン風か。有らぬか忍び込む女心の逞しき。ハヤミフシ枝をたよりに傳ひ來る。地花町は待つ人のそれかと思ふ親ひ足。ひらりと飛ぶは女の姿。何者なるぞと走寄り顔を見れば兄嫁の筑羽根。ヤア詞花町樣か。何ぢや花町かとは。エヽほんに此所はなう。人の女房の風上にも置かれぬどう者生。能うも〳〵大切な夫の訴人。厚皮顔火に懲りずと忍び入つたも親が指圖か。六の君樣助けうかと氣づかひで吟味に來たか。地何とさうで有らうがなと。腹立つまゝのあくて口聞くにあやまる身のせつなさ。女のさがなき悋氣より夫の難儀。姫君樣失

うては道立たず忍び入つた心はな。お身に代つて死ぬる合點連合の妹御のお手にかゝれば筑羽根が本望サア切つて下さんせと。後髪かき撫で清げなる首差伸ぶれば。詞ホ、得切るまいと思やるがほんに切るぞや。ハテ夫の屋敷へ戻つて死ぬるが。親と一つでない言譯サア切つて。エエ何の切ろぞいの心は知れた疑ひ晴れました。地私が今日戻つたは兄様を夫の疑ひ。其方ばかりでは心もとない今宵八つを合圖にして忍び入らう。詞ヲゴされと約束左近殿が後楯。地お前と私が心を合せ姫君様を助けると。二人が談合フシ物かげより。地覗ふ蘆屋道滿が。耳にこたへる八つの鐘すはやと松の枝押分け。忍ぶ出立は夜廻の裝束凛々しき兜頭巾。詞ヤアごさんしたか待兼ねたといふ地聲高しだまれ〳〵と仕方で止め。ふはと飛んだる足輕ろ〴〵。うなづき合うて三人一所。勝手覺えし廊下の脇道鼻息もせずフシ忍び込む。地時も違へず又高塀の屋根にすつくとたちつけコハリ羽織。同じ出立の兜頭巾塀ををりふし人はなし。心安しと門口の貫の木そつとナホス明けかけて。退足の勝手迄フシ仕濟したりと忍び込む。地先へ入つたる忍の者六の君を奪ひ取り。廊下を傳ひ立出づる。道滿手鑓押取つてヤア何處へ〳〵。詞顏は隱せど左近太郎尋常にお供はせで。盜賊同然の振舞双物汚しに命は取らぬ。姫を置いて立歸れと地聲かけられて返事もせず。姫を奥へ押やり〳〵無二無三に切りかゝる。さしつたりと鑓取伸べ突けば開いて打つ刀。はつしと反ねて隙間なく弓手の脇腹馬手へすはと突通せば。うんと叫んでどうと伏す。花町見るより夫の敵遁さぬと切付くるを引つぱづし。片手につかんで捻伏すれば。詞ア、其娘過ちすなと頭巾をぬげば父將監。ハツハア地南無三寶早まりしと。驚く道滿花町もスエテ共にうろつくばかりなり。地將監深手にちつとも怯まず。詞年寄れば腕の働き汝には劣りしが劣らぬは謀。兄弟を不便に思ふ親の。了簡を聞かぬ故。裏門よりそつと拔け出で又我が内へ忍び込む。親の心を天道も憐み給ひしか。地左近太郎が來るともしらず忍び込む某を。左近太郎と心得て妹といひ兄といひ。我が子をだますも我が子の可愛さ。突きとめられしは本望ぞや。詞先達て言ふ如く六の君を落せし將監。親ながら討ちとめしと白髪首差上くれば。道滿が忠も立ち花町が夫婦の仲。地兄弟仲も違ふなと心を碎きし我が最期。フシ悲しとばし思ふなよ。地亡き跡の弔ひとて僧も呼ぶな供養もすな。兄弟仲よくしてたもるが冥途の土産でおぢやるわと。聲も涙にむせかへれば花町悲しさ遣る方

なく。二人が二人で父上と知らぬ不孝の五逆罪。詫ぶるに甲斐なき御最期やと。わつと叫び　フシ伏し轉び歎き。悔むぞ哀れなる。地道滿涙押拭ひ　エ、しなしたり／〜。某武藝の餘力にて陰陽龜卜の道を明らめ。詞天地の變化人間の禍福指す所を違はさず。又は箱に入れて隱せし物も算木を以て占へば。柑子なれば柑子と知り鼠なれば鼠と知る。地妙術を得たる身が。僅か一重の兜頭巾父とも知らず早まりしは。陰陽師フシ身の上知らず。地子の身として親を討ち忠節顏は不孝の不孝。天の照罰待たんより道滿これにて生害と。指添に手をかくればやれ待てとめよ花町と。父が詞も妹が縋るもいや／〜フシ放せ／〜とせり合うたり。詞これ／〜道滿早まるまいと聲をかけて左近太郎。姫君筑羽根伴ひ出で。地樣子は奥にて承る。親と知らず手にかけしは。天道が能く御存じ落命有つては不孝の上塗り。自害をとゞまり臨終の迷を晴すが孝行ぞとフシさま〳〵に押留め。地老躰の命に代へ六の君の御介抱。彼と申し是といひ有難き御厚恩せめて一つは報ずるため。詞恨みある左大將なれども御親子の忠義を感じ親王の御前へは沙汰なしに仕らん。地御安堵有つて往生遊ばせ。コレ姫君樣筑羽根殿いづれも寄つて御暇乞ひ。近う／〜と取廻せば苦しき中にも莞爾と笑ひ。ヲヲ添い聟殿。主人の名も出す粹も存命。今こそ嬉しい隱居の宿替へ安樂世界でたのしまんと。鎖引拔けば老の身のフシ脆くも息は絶えにける。地人々叶はぬ道なれど今更慕ふ別の涙。惜しみ悲しむ聲々に八聲も告げて明けわたる。地治部大輔は刻限ぞと。門内へつゝと入り。詞ヤア六の君まだ討たぬな。サア此檢使が見る前ですつぱりいはしはや渡せ。早う／〜と罵つたり。地折惡しければ躊躇ふ間鎖押取つて後より南無阿彌陀佛と筑羽根が念力脊骨へぐつと通り。ぎやつと一聲岩倉治部日來の我武者も急所の痛手。只一鎖に死してげり。つくばね死骸に立並び鎖の穗先を逆手に取り。咽吭に押當つゐ道滿寄つて鎖もぎとり。詞某への言譯斯う無うてはかなはぬ筈。左大將の惡逆皆此治部が入れ性根。早いか遲いか遁れぬ最期。地所も變らず日も變らず其方が親我が父。互の子供が手にかゝる例は末代よもあらじ。不孝の姿改めんと指添拔いて　フシ腹　拂ひ。蘆屋兵衛道滿今日より武士をやめ。陰陽の博士となつて形も變ゆれば名も更め。詞道滿と書く二字の訓を晉にて蘆屋の道滿刀入らぬと投捨つれば筑羽根も我が黑髮。切つて捨つる身存へて。身と親の菩提の發心。照綱大きに感じ入り。ア、尤もの了簡。詞名も姿も改むれば不

孝の人口遁るゝ道理。元より陰陽龜卜の達人存命有るは國家の寶。父尊靈も滿足ならん。地扨此治部は檢使の役討れし死骸の言譯有りや。ホヽウ其儀は心やすかるべし。將監樣の手にかゝつて。斯くの通りと申しなばさして咎も有るまじき。何から何迄親の慈悲遺言守つて御首を。主人の方へ持參せん照綱には六の君。館へ急ぎ御供と別るゝ袂濡るゝは袖。引かるる心離れぬ恩愛聟よ。我が子よ嫁娘と夕は呼ばれ曉は。霹と消え行く魂よばひ輪廻流轉の空晴れて。清き最期は一念不生迷はぬ道は則身則佛。菩提の道に入る夫婦。姫を誘ひ行く夫婦。孝行忠義二筋を キと一つ血筋にむすぼれし親子の。別れぞ哀れなる

第四

明隣柿の木を。十六七かと。思うて。覗きやしほらしや。色づいた。十六七かと。思うて。覗きやしほらしや色づいたかけて織る ナホス 賤が麻機あさはかに。何の織ろぞいの。生先祝ふいとし子に。千筋萬筋よみ入れて。大名縞織りて着せうの所も フシ 安倍野の蘆垣の。地間近き住吉天王寺。靈佛靈社に歩みを運び。父は我が子の出世の祈り母は心を染機の。辛氣辛苦を堅横に。梭を投ぐる間の手すさびも。子に世話おるとぞ フシ 見えにける。地母は機屋を立出でて。詞コレ〳〵坊ち昨日も父樣此奴には惡い癖が有る。只虫螻蛄を殺したがる。今から殺生好んで碌な人には成るまい。必ず蜻蛉釣るなよ。ねぎや鑫を殺すなとお呵りなされたを忘れてか。たつた一人の興勘平は京へ行く。地留守の間に池へもはまるか疵でもついたら母は言譯なんとせう。詞必ず〳〵庭より外で惡あがきしてたもんなや。サア爰へおぢや〳〵。先にから間も有る乳飲んで晝寐しや。そんなら母樣晩には。松虫塚へ虫をたんと取りに行くぞや。ヲヽ安い事それも父樣連れざらう。地小言いはずと 取ねんねこせ〳〵。いとしい者を誰がいよ。ねんねこせ〳〵。ねんねが守は何處へ往た。山を越えて里へ往た。里の土產に何もろた。ナホス でん〳〵太鼓にふり鼓。地樂も囃子も入らばこそ。手間隙取らずすや〳〵と。母に添寐の稚子は フシ いかなるよい夢見るやらん。詞おか樣内にかい。ホ添乳なされてちや。此頃の雨つゞきでめつきりと木綿の直がよいが。織だめがあらば一疋でも半疋でも賣らしやんせんかい。ヤア地えいとおちがひおろして腰打かけ次に火を貰うてさらば一服致さうか。詞ア致してもらふまい子供の寢入口。かさ高に物言うて下さんな。今日は又けしからぬついに見馴れぬ木綿賣

達が。無いといふに立かはり入かはり此方で三人。そして家の内や人の顏を。きよろ〳〵と合點の行かぬ木綿買達では有るわいの。ハテ左樣言はしやりますな。合點が行かいでからが高が天下の町の借屋に住む木綿買。氣づかひな事はござりませぬ。斯ううろ〳〵と見廻すも。ア、何うやら機に器用さうなおか樣の顏ぢや。定めて織貯が有らう賣つてほしやと思ふからなんと賣つて下さりませぬかい。地サア次第々々に寒うは成る。夫の肌着よ表換へよ。子にもさつぱり着せたけれど。繰るも績ぐも織るも染めるも手一つで。内の肌さへ寒ぎかねる。詞賣る木綿はいかな〳〵切一尺ごさらぬ。無い所に長居せずととつとゝ往んで下されと。地愛相なければ立上り。詞ハテおか樣さう沒道道に言はずとも。仕事は心につれる物ぢや。氣だけを長う心の幅ひろう。詞詞に艶も有る樣に其内織つて下さりません。又御無心に參らうと。我が挨拶をしほにして フレすご〳〵出でて歸りけり。地ア、やかましやよしない事に際取りしが。嬉しや日脚も八つがしら。夫の歸は間もあらう。七つの鼈へは屆く手の片付けて饗せん。ねんねこねゝことたゝきつけ。又機前にさしかゝり。眼隣柿の木を。十六七かと。思うて覗きやしほらしやナホスフシげしうはあらぬ。裙外れ。老人夫婦の旅姿二十歳餘りに大人びて。娘めく人介抱し旅とてもまだ泊經ぬ。足も輕げにそんじよそこと人の教への門の口。詞コリヤ〳〵爰よと父の老人二人を近付け。保名の在所聞くと等しく。是迄同道はしたれども。よく〳〵思へば別れて早六年。長の年月生死の問ひ音信もせず。此方こそ變らねども。地保名の心底量り難し。先づ某一人對面し。所存を聞いて其上で。母も娘も呼出さん。暫く妻に影隱せいで案内せん賴みませう。物申さんと内に入り。見れども〳〵人はなし。詞扨は保名は他出召され。あの機音は召使か。御免あれ地それへ參ると窓に立寄り顏見合せ。扨も似たりと喫驚し興覺め門へ駈出づれば。女も窓の戸引立てゝ織る手拍手の音すめり。詞ヤレ〳〵かゝよ娘よ奇妙々々。娘の葛の葉が彼處に機織つてゐるわいと呆れ顏。ア、つがもないこれ爰に居る葛の葉が。何の彼處に機織つてゐる物ぞ。廣い世界に同じ人間似た人も有らいでは。ア、仰山な事ばかり。いやなう大概物の似たといふは。鳥と烏雪と雪。其段ではない正銘正眞の娘の葛の葉よ。地疑はしくば覗いてお見やれ。それは興がる似た人や。娘もおぢやとさし足し忍ぶ間近き窓障子。破れに二人が息を詰め。覗けば見かはす顏ばかり。何方

ぢや誰ぢやといふ聲迄。似はせぬやつばり本々の。葛の葉も肝潰れ 母の手を引き逃出づる。 地なう〳〵親父殿物が言はれぬ。あちらが誠の葛の葉かこれがほんの葛の葉か。親の目にさへ今となり子にどまぐれて氣が迷ふと。 投首すれば葛の葉も。 地母様お道理私が心にさへ。おれがあの人かあの人がおれかと思はれて。俄に胸が遣る瀬ない。父様どちらを何うといふ。分別なされて下されと。袖に縋れば引寄せて三人顏を眺め合ひ溜息へついたる。折からに。 地立歸る安倍の保名それと見るより。ヤア庄司殿御夫婦か。 詞お身は保名かなう懐かしや〳〵。それは此方も御同然。先づ奥へいざ御案内と立つ袂をひかへ。 詞先づ〳〵急に渡す者あり。コレ預りの葛の葉連れて參つた。 地渡し申す聟殿と引合されて葛の葉は。流石二人の親の前言はで心を知れかしの。 顏に會釋ぞこぼれける。 地保名大きに痛み入り。 詞是は〳〵。拙者が留守の内早葛の葉に御對面なされ。衣服を着せかへ今連れて來た樣に見せ。此保名を困らせてお笑ひなされう爲か。女房も女房今始めて來たやうに。所躰をつくつて何ぢやの。ハ、、、、此申譯こそ段々。御息女葛の葉と夫婦になり、是に有る事。先年信太の宮にて惡右衞門狼藉の時。既に事雛儀に及び生害仕らうと存ずる所へ。早速此人が駈付けさま〴〵の介抱。 地それより一緒に立退き所々漂泊し。此所の住居はや五年。安倍の童子と申す五歳の男子をまうけ。おとなしく生立ち申すにつけ是を力にお詫申さば。孫に免じ我が不行跡御免も有らうか。今日は參らう明日はお詫に參らんと。口では申せども何か所存に任せず。一日々々と相延び今更お詫申さう詞もない。重々の不調法孫に免じ御勘忍有るやうに。母樣お執成しなされ下されと。 身を投げ伏して詫びにける。 詞イヤサ言譯所でない。來て見たれば不思議たら〳〵。先づあの機織る人を密かに覗いて見ておぢやれ。 地げにも〳〵女房は爰に居る誰か機を織らんと。吱きながら立寄つてそつと覗いてびつくりし。色を違へ立歸りあそこにも葛の葉爰にも葛の葉。コリヤ如何ぢやこは〳〵如何にと顚倒し。奥を見ては呆れ顏此方を見ては興覺め顏。物をも言はず立つゝ居つ思ひがけなき驚に 只茫然たるばかりなり。 詞ヲ、當惑の躰至極せり。我も信太にて別れし後惡右衞門が讒言にて。重代の所領沒收せられ。吉野の山の片里に世を忍び住む其内に。貴殿の事を戀慕ひ焦れ煩らふ此娘。五年の年月色々看病肝を焦す所。不慮に此頃貴殿の在所聞くとひとしく。忽ち病氣平癒し夫

婦が召連れ來て見れば。詞思ひも寄らぬ二人の葛の葉けふもあすも覺め果てしが。退いて分別するに離魂病といふ病有り。俗には影の煩ひといひ形を二つに分るといへども。それも一つ軒をば離れず。時々形を合すといへばそれでもなし。地正しく是は變化の所爲か又は天狗のわざなるべし。我が娘に引合せ誠をもつて理を押さば。忽ち姿を顯すべし性根を忘ずる所でなし。保名心をつけられよ氣をつけ給へ聟殿と。夫婦力をつけ給へば仰せ迄も候はず。我も加茂の保憲に隨ひ是しきの邪正を糺す事。一句一指の手段に有り。きつと證を見せ申さん。各は暫しの內。見苦しくとも此物置に密かにお忍び下さるべしと。餘儀なき詞に人々も構へて仕損じ給ふなと。危ぶ心の物置の簾を上げて忍ばるゝ。地保名異なき風情にて內に入り。詞是は〳〵坊主めがあがき草臥れ。此蹈反つて寢た姿わいの。童子が母はおはせぬか今歸りしと呼ばはれば。フシ前垂襷取りあへず。地いつより今日のお歸りはおそかりし。お肌寒にはなかりしか。詞いや〳〵空も暖かに住吉へ參詣し。歸りは例の天王寺。なう思ひも寄らず六時堂の前。お身の父庄司殿御夫婦にはたと行逢ひ。日頃の不屈胸につまつて挨拶をしかねたれば。あちには一向恨みの氣もなく。在所を聞いた故娘に逢はうため。尋ね來れども見る通り連衆も有り地此衆を片付け日暮にはそれへ參らう。食物の用意は無用洗足の湯を賴むとなかなか心解けたる挨拶一つ二つ物言ふと思ひしが。かいつまんでも五年の話思はず時を移いた。お身も久々の對面さぞ悅び。身も大慶と物語れば。それは何よりお嬉しや日暮とて間もなし。用意無用との給ふとも何ぞせずはなるまいか。詞いやいや孫をつき出しお目にかけるが馳走の一番。お身も髮に櫛でも入れ衣服も着かへ。地しほたらとした躰を見せませぬそれが馳走の第二番。早う〳〵身は夜と共の物語。此草臥れでは續くまい日暮迄一睡せんと。言ひつゝ女房の形風情見れども驚く躰もなく。髮とり上ぐる其姿何處に一つの言分なし。但しは娘を連れて來た庄司夫婦が何ぞではあるまいかと。迷ふ心の奧の間にフシ忍びて事を窺ひける。ハルフシ妻は衣服を更めてしほ〳〵と奧より出で。臥したる童子を抱きあげ。乳房を含め抱きしめて言はんとすれどせぐり來る。涙は聲に先だちて暫く咽び入りけるが。地恥かしや淺ましや年月包みし甲斐もなく。おのれと本性をあらはして妻子の緣を是限に。別れねばならぬ品になる。父御に斯くと言ひたいが互に顏を合せては。身の上語るも面ぶせ。御身疎耳によく

覺え父御に斯くと傳へてたべ。詞我は實は人間ならず。六年以前信太にて惡右衞門に狩出され。死ぬる命を保名殿にたすけられ。再び花咲く蘭菊の。千年近き狐ぞや。洞へ我故に數ヶ所の疵を受け給ひ。生害せんとし給ひし命の恩を報ぜんと。葛の葉姫の姿と變じ。疵を介抱自害をとどめいたはり附き添ふ其内に。地結ぶ妹脊の愛着心夫婦のかたらひなせしより。夫の大事さ大切さ愚痴なる畜生三界は。人間よりは百倍ぞや。殊におことを儲けしより右と。左に男夫と子と。抱いて寐る夜の睦言も昨夜の床を限りぞと。しらず野干の通力もナホス いとし可愛に失せけるか。今別るゝとて父御前の業でもなく。元より名を借り姿を借りし葛の葉殿。恩は有れども怨はなし。庄司殿御夫婦を實の祖父様祖母様。葛の葉殿を眞實の母と思うて親しまば。さのみ憚うもおぼすまじ。惡あがきをふつつと止め。手習學問精出してさすがは父の子ほどあり。器用者と譽められよ。何をさせても埒あかぬ道理よ狐の子ぢやものと。人に笑はれ誹られて。母が名迄もノゝ呼出すな。詞常々父御前の虫螻蛄の命を取る。碌な者には成るまいと地只假初のお呵りも。母が狐の本性を受繼いだるか淺ましやと胸に釘針刺す如く。何ぼう悲しかりつるに。成人の後迄も小鳥一つ虫一つ。無益の殺生ばしすなえ必ず〳〵別るゝとも。母はそなたの影身に添ひ。行末長く守るべしとはいふ物の振り捨てゝ。是が何と歸られう名殘をしやいとほしや。放れがたなや此方寄れと抱上げ。抱付き抱きし。めて思はずわつと泣く聲に。保名一間を走りいで仔細は聞いたり何故に。童子を捨てゝやるべきと呼ばはる聲に庄司夫婦。葛の葉も轉び出で放ちは遣らじと取付けば。抱きし童子をはたと捨て フシ形は消えて失せにける。地庄司目をしばたゝき。エエ扨夢ばかり斯と知つたらば。ふか〳〵尋ね來ずとも仕やうもやう有るべきに。無慚の次第を見る事やと。夫婦が悔めば葛の葉も フシ手持無沙汰に見えけるが。詞ア、さうぢや何は兎もあれ斯くもあれ。自らが姿と成り自らが名をなのり。產んで貰ひし此坊はとりもなほさぬ我が子なり。地父様母様お前方の爲にも。眞實の孫ぢやと思うて下さんせ。コレ坊ち今から此母が身に代へていとしがる。今迄の母様の様に。母様々々としなつこしう賴むぞや。ヲ、好い子やと抱き給へば地乳を探していやゝ〳〵。此母様はそでないと膝を遣下り見廻して。母様。々々と呼び叫べば。保名堪へかね大聲上げ假令野干の身なりとも。物の哀れを知ればこそ五年六年付纏ひ。命の恩を報ぜずや況

や子迄まうけし仲。狐を妻に持つたりと笑ふ人は笑ひもせよ。我はちつとも恥かしからず。別るゝとも相對にて互に合點の其上は。失せもせよ消えもせよ此儘にては何時迄も。放ちはやらじヤア葛の葉。童子が母よ女房よと間の襖を引明くれば。向ふの障子に一首の歌。繼しくは。尋ね來て見よ和泉なる。信太の森のうらみくずのは。ハア 地 扨は一首の記念を殘し。つれなうも歸りしな我に名殘は殘らずとも。童子は不便に思はずかと。奥に驅け入り表に出で狂氣の如く驅けめぐれば。童子も父の跡につき母樣何處へいかしやつた。母樣なうとかつぱと伏し聲をばかりに足擦し身を悶え歎くにぞ。庄司夫婦葛の葉も。共に哀に 詞 取亂し前後不覺に歎かるゝ。 地 庄司歎を止めんと思ひヤア保名不覺なり。 詞 狐ばかりが葛の葉で我が娘は葛の葉ならずや。殊に殘せし一首の歌。 地 繼しくは尋ね來て見よと詠んだれば。いつでも信太へさへ行けば出合ふに疑なし。エ、未練散々 詞 卑怯至極といさむる所へ。 地 今朝より立まふ木綿買一つになつてつゝと入り。 詞 ヤア安倍の保名葛の葉。信太の庄司見付けた〳〵。斯くいふは石川惡右衛門殿家來。花柄の段八信樂雲藏落合藤次。主人の御心をかけらるゝ葛の葉を隱し置く。保名は密夫同然討殺して姫を連來れと此頃爰に徘徊し今日出くはせたは百年目。女房が有つても首がなうては濟むまい。畏つたと葛の葉を渡せ〳〵と呼ばはつたり。老人夫婦足弱の殊に歎に氣も後れ。途方にくれて立騷ぐ保名はつと心付き 詞 申し申し騷ぐまい。葛の葉は童子を抱き御夫婦を介抱し。裏口を出て影隱した遠いへ逃ぐるに及ばずと。 地 裾引つからげ突立ちあがり。愚者に向つて返答なし。葛の葉がほしくば此保名を首にして連れて行けサア來いと。形見こそ今はあだなれ幸ひと。織りかけし布機の 詞 招き掛板。卷竹よ籐梭筬よ鑓なんど。はづみを打つて投げかけ〳〵。ためらふ所をまつかせと。親攫えいとこち放し。科有る者を成敗の礫といふはた物の。鹽梅見よと振廻し日來には似ぬ强勢も。狐や力添へぬらん 詞 はげしかりける働なり。 地 落合は逃仕度段八雲藏生兵法。肋と眉間に大疵請け 詞 のたり廻つて死してげり。 地 人々驅け出で手柄々々と勇めども。葛の葉は勇みなく何をいうても私に。乳が無うては何時迄も此子が馴染う樣がない。あつちに有つても入らぬ乳貰うてほしいと泣きければ。ヲ、道理々々それ迄もなく一度は尋ね逢はではかなはぬ義理。夜道を行くもたど〳〵し明けなば夫婦童子をつれ。尋ねて來ませ和泉なる信太の森へ

と 三遍

道行しのだの二人妻

二上り謡終 爰を。哀を。とゞめしは。安倍の童子が母上なり。元より其身は畜生の苦み深き。身の上を語り明かして夫にさへ。添ふに添はれず住み馴れし我がふる。さとへ。歸ろやれ ナホス 我が住みすてし。一村の。假の宿は秋霧に立ち紛れたる。フシ いろ〳〵菊も。サハリ 此身知るかとはづかしく。足爪立てゝちよこ〳〵〳〵。ちよこ〳〵〳〵と爪立てゝ。所體亂るゝ ナホス フシ 萩薄。はつと思ひてとりなりを 小オクリ 作り。繕ふ笠の内。スエ 傾く日影まばゆく。三下り 忍ぶ身のさはりは。此處の人里て。彼處の往來 合 それに嫌なは。犬の聲ぞつとした。ナホス ぞつとそげだつ フシ 露時雨。降りみ降らずみ。照降に。我は古巣へ歸る身を嫁入々々と里の子の。長唄 あのいけを見るにつけ跡にましまし父母に預け置いたる稚子の。乳房尋ねてさこそ歎だく虫の聲猶悲みの十寸鏡。ギン 水に映して。我が姿かいしよあり氣に行く野路かん不便やと。フシ 涙に道も見えわかず。こゝはいづくとしら露もオクリ 千草に。すを。そよ〳〵戰ぐ野分につれて。栗や奥稲に。フシ から〳〵からり。曳かぬ鳴子の

音すれば。もし獵人の有るやらんと。周章驚き振返る。小鳥追ふ家は戸鎖してそれと。咎むる人だにも（フシ）ないて身をもや悔むらん。今は悔やまじ（ヒロヒ）歎かじと。いへど亂るゝ蘭菊を分けつゝ行けば。程もなく我が住む森の。下陰に立休らふと。見えけるが草がく。れして（三章へ文彌）（ハルフシ）こゝに哀を。とゞめしは。安倍の童子が母上の。一人は跡にとゞまれど。尋ぬる生のかた〳〵の。一人は人の胤ならぬ。其憂き事に。（ナホス）身を耻ぢて。戀しくは尋ね。來いとの言の葉に。書捨てたるをかたみとも。それをしるべに葛の葉は。保名諸共諸袖に（喫サハリ）ほだしの種の。いとし子を。賺し誘ひ和泉なる。（フシオクリ）信太の〈森へと。こゝろざし。（ニルフシ）振返り見る弓手も馬手も。里遠く。遠里小野や淺香潟。安倍野も跡に難波津の。三津の浦風烈しきに（スエ）風ばし引くな引かさじと。脊に負ふてふきり〴〵す。（フシ）きりはたりてふ。織る賤が家の。簑の晉（フシ）堺の町も出はなれて。心細道分け迷ひ。（江戸冷泉）行けば。微かにゆふづく日。（合）人顔たゞ何となく淋しきに。（セツユリ）尾花儚しく。招くにぞ。それを頼みの力草。茂る百草道草を。引く手にすがり（ナホスフシ）愛らしく。指さす方に。又ちら〳〵と物がさへもちら〳〵と。（ギン）暮れぬさきより灯す火は。神の御燈かいや白菊の。（本フシ）花に露ちる秋の野か。あれこそ佐野に灯す火の。（スエオ）入江々々に網引の聲も（文彌）風にさそはれ行く道の。梢まばらに末枯れて。らすぞ哀なり。（喫二上リ）思にや。焦れて燃ゆる。（合）野邊の狐火小夜更けて（ナホス）燈それかあらぬか篠木か。まがふ方なく子故の闇に母も憧がれ灯す火と。走りつく〴〵見渡せば影も姿も泣き焦れゆく大鳥の。

書肆浪速堂村田屋

鑑屋道滿大内

羽翅重ねて雛鳥を抱きかゝへて玉鉾の。よるかたわかぬ旅なれどいそぐ心に道ばかも。スエチゆくての森を目當にてしばし。疲れを晴しける

地誰に問ひ誰に問はましいはくずの。千枝にわかれて物思ふ我も思に木蔭れて。保名夫婦稚子をスヱチさま〳〵いたはり介抱し。アゝしんどやと葛の葉が薄折敷足休め。詞ヲゝ習はぬ旅路草臥も尤も向がお事が生れ故郷。こちらに見ゆるが往昔夫婦の契を結びし信太の社ふと馴れそめし故にこそ。地互にかゝる憂目にあふも覺悟のまへ。詞とかく只。世の中に歎きはなきに悅びを。求むればこそ歎きとはなると詠みしも今身の上。地ヲゝさうでどざんすとも味な緣から苦勞あそばし。お前に添ひたい〳〵と私が輪廻の深き故。惡右衞門に支へられ兩親迄も思はぬ流浪。昔の花の住家へ立寄るも人目恥かしく。詞どうかかうかと案ぜしに。丁度薄暮好い時分何とぞ尋ね彼の中の母御にめぐり合ひ。此子の思も晴してやりたし。地一つには又私もいひたい事は山々。成程片時も急がんと親子夫婦手を引合ひ。彼の隱栖は何國とも知られず知らぬ亂咲。菊のうね〳〵其處よ爰よと押分け搔分け。詞童子が母やい。童子の母御いなうと地呼べど叫べど答さへ。事とふ物は秋の風。野邊にしをるゝ葛の葉の。恨のたねや殘すらん。詞扨はふつゝと思ひきり。最早逢ひも見もせぬか。地エゝ胴欲な心やな暫なりとも形をあらはし。此世の思をはらさせよと。泣きくどけば葛の葉も聲を上げ。詞神通とやら得た身にて是程慕ふが聞えぬか。たつた一言地童子に詞をかはして下され。此子は可愛うない事かと。草場にどうど伏轉べば。辨へ知らぬ稚子も。フシ共に泣くこそ哀れなり。ヘルフシそよと吹く風。身にしみて。地心細き折こそあれ。我が子の紳にからまれて顯れ出し童子が母。顏も姿も葛の葉に。又葛の葉の二面二面の鏡に一人の影フシ映し見たるが如くなり。地保名見るより走り寄り。やれなつかしやゆかしやな。いとし可愛の子を振捨て。何處の浦何處の里に住まれうぞ。詞如何なる怪しき形なりとも厭ふまじ。地せめて此子が智惠づく迄スヱチ育てゝくれよとかこつにぞ。ほんに實に今迄は此葛の葉に成りかはり。夫への心遣ひ殊に身腹も痛めずに。好い子を儲けし悅は。餘所の歎きとフシなりたるかや。地人に限らず虫螻蛄迄親子の別れ。悲しうなうて何とせう。詞況してや是は心好う添遂げて居る仲へ。思ひがけなきみづからがぼか〳〵と往た故に。當惑しての家出かや。今日も今日とて此子がの。生みの母は無きともしらず。

やつぱり此葛の葉を。實の親と思うて心能う遊べども。地乳を探つて母様なうと。泣くか悲しい〳〵とスエテわつとばかりに伏沈む。地母は咽び絶え入りしがやうやうに涙を抑へ。詞實の形を顯してお目にかゝるも恥しく。以前の如く葛の葉様の姿にて申わけ。お二人共に聞いてたべ。此母が野干の身でさら〳〵夫の色香に迷はず。御恩を送る爲ばかり。年月を重ねしに去りがたき因果の胤を身にやどし。古栖へも戻られず。地我が子に繋がれ暮す内思はず此身の懺悔をば。言はねばならぬ義理と成る。人にしられて一日も人界の交りかなはず。扨こそ故郷へ歸りたり。地猶此上にも保名様恨みをはれて此子の行末葛の葉様頼み入ると童子を膝に抱きかゝへ。スエテ乳房を含め脊を撫で。文彌げにや實に此子程。果報拙き者はなし。詞有るが中にも畜生の腹をかりしも前世の業。おとなしうなり末々は宮仕するとても野干の子とて侮られ。心苦しう思ふらめ。地それも誰故此母が人ならぬ身の悲しさよと。或は歎き恨みわび。スエテ身悶えしてぞ伏し沈む。ナホス地保名もせきくる涙をとゞめ。詞汝が詞尤もなれども淫婦と變じ數多の人を誑さば。吃枳尼天の咎めも有るべし。是は正しく佛躰に等しき人間を助くるに。天の咎めもなどか有らん。地サア〳〵安倍野へ同道せん。いや〳〵いや。詞それは思も寄らぬ事。色に溺れ我が子に迷ひ。此身を知られた其上に。再び人間に交る時は。五萬五千の眷屬に疎まれ剩へ。盡未來際畜生界を出でやらぬ。地其苦しみには代へ難し。名殘は盡きじさらば〳〵いとほしの此子やと。顏にあて身にそへてスエ泣き沈み〳〵。地今は泣いても悔みても返らぬ事と立上るを。こは情なし今暫しと取付くを振拂ひ。縋りつくをもぎ放し。詞此姿ゆゑとゞめ給ふ。地いで〳〵愛着の絆を切らん。實の形これ御覽ぜといふかと思へば忽に。年ふる白狐と身を變じ我が子の身の上守らんと。見返り〳〵懐しげにフシ草の茂みへ隱れける。地なう心づよき別やな。其形をも厭ひはせじ。今しばし暫しといへど其甲斐は。嵐につるゝ翁の嚮。二上り風草茫々たる信太の原の。草茫茫たる信太の原に。面影計や殘るらん。俤ばかりや三重殘るらん。フシ折から爰に。地旅乘物石津の方より來りしが。若菟立寄り小腰を屈め。詞保名様にて候ふな。御行方を尋ねん爲主人蘆屋の道滿遙遙下り候ふと。地聞くより夫婦目を見合せ。願ふ所の御尋ねそれへ參つて對面と。女房に指副へ渡せば凛〻しげに脇ばさみ。乘物間近くつゝと寄り。詞姉様の敵覺えがあろ。サア地蘆屋殿是へ出てフシ勝負

勝負と壁かくる。地こは狼藉と下部ども立騒げば。ヤア〳〵騒がし鎭まれとゆたかに出づる蘆屋の道滿。斬髪に僧衣の姿保名見るよりハア聞えた〳〵。詞身に覺え有る敵持ゆつくりと夜が寐られず。樣を變へて助かる氣か衣は着ても敵は敵。是なるは身が女房葛の葉姉榊が相果てしは加茂の家に傳はる秘書。汝が奪ひし故ならずや。地陰陽の奥義の望を失ふ保名が鬱憤晴やらず。丸腰を相手は死人も同然サア元の武士に立歸り。尋常の太刀打と詰めかくればちつとも騒がず。詞お身達が恐ろしとて樣を變ゆる道滿ならず。據なき主命父將監の忠死につき。斯くの如く薙髪せり。又榊の前の生害は後室幷に岩倉が爲す所。彼家の一卷某が手に入りし疑はさる事なれど。奪ひ取しなんどとは保名とも覺えぬ一言。某が心はさにあらず。互に他事なき弟子兄弟不慮の難儀に世をせばめ。地此和泉路に漂泊と聞きつるばかり仕官の身。心に任せず年月を過せしが。此度櫻木の親王の御賢慮に叶ひ奉り。大内小博士に任ぜられ。生國津の國蘆屋の庄を賜つて。彼の地へ赴く折に幸ひ尋來りし其仔細は。先師加茂の保憲一字を讓りし秘藏の弟子。保名の繼ぐべき家の重寶我が方に置くは道にあらず。返し與へん心底にて是迄持參致せしと。地乘物の内より恭しく取出し。此書を考へ道を開き再び歸洛致されよ。此上にも我が心底疑はしくはともかくもと。詞涼しき有樣保名はつと平伏し。スエチしばし詞もなかりしが。詞浪人の心の僻情有る蘆屋殿に。粗忽の雜言今更悔む甲斐もなき。地色に迷ひし身の越度大内の聞えといひ。主人小野の好古卿御憤り憚りあれば。保名が出世の望はなし。何とぞ悴を守立てゝ家名をつがせ申したし。御芳志の賜童子に讓り給はれと。先非を悔る夫婦が願ひ。詞ハテ親子の間はいづれにても其方の心任せ。童子爰へと招かれて。地葛の葉嬉しく抱き寄せ。アレ餘所の伯父樣が結構な卷物そなたにやろとおつしやる。行儀に其處へ畏まりや。詞ヲヲさうぢやさうぢや辭宜申しや。是は是はおとなしい成人して學問精出し。地親の名を上げられよと渡せばいたいけ兩手に受け父樣めんたししますると戴き戴き。卷の表紙を打守り。詞コレ餘所の伯父樣此書付は金烏玉兎金烏といふはお日樣の中に有る三足の金の烏。玉兎とは又お月樣の中で餅を搗く玉の兎。月日を記せし此卷物。地天地の間にあらゆる事是を見れば知れるのと。舌も廻らぬ五つ子のぎよつとした事言ひ出すにぞ。夫婦も驚き道滿も。あまりの事にこはげ立ちフシ顏をながめて居たりしが。詞驚き入つ

たる童子の發明。尤も世上の子供にも四つ五つで大字を書き。繪馬などに上げるも有り是は格別。月日の異名の理を辨へ。地天地のことを記せし書とは。さすがに保名の教へ方生先が思はれて。夫婦にもさぞ御滿悅。詞イヤ御中言に候へども。父敎へされば子愚なりと本文は存じながら。地日陰者の艱苦の渡世何を敎ゆる事もならず。やりばなしに育てし悴。只今の一言親ながら不思議晴れず。詞かれを產みし母親は當所に年ふる白狐なるが。先年助けし恩を思ひ葛の葉が姿と化し我を育む此年來狐と知らず相馴れて。地出生したる此童子。白狐の才を享けつるやらん。恥しき身の懺悔と。地聞くより道滿手を打つて。詞扨こそ〳〵。尋常ならぬ人相かやうの例は唐土にも。美仙娘といふ狐。南京城外の民黃琢が孝心を感じ。妻と化して一子をうむ。其子の名は黃繼聰明叡智かくれなく。朝に仕へて高官たり。詞此童子もまつその如く一を聞いて十を知る。秀才いかで黃繼には劣るまじ白狐通を備へし才智試に物問はんと。膝の上に抱き乘せ。詞コレ童子。此日本の始め覺えずやと尋ねば。ハテ知れた事問はしやる。天神七代地神五代。人皇の始りは神武天皇と皆言へど。瓊々杵の尊を始めとする。ヲ、詳に聞えたり。サテ佛法は。大聖世尊釋迦牟尼佛。遍く日本に弘りしは忝くも聖德太子。ム、儒道はいかに大聖人孔子なり。三十一字の言の葉は。八雲たつ出雲の御社素盞嗚の御神。八重垣つくる詠歌のはじめ。地詩はからうたと是を訓み。樂の章を元として舞の作り始め給ふと。平仄あはせし調答へ。管絃樂器もそれ〴〵に。わけて尋ぬる琴の緒の數を調べて伏犧の作。琴のことは三尺六寸和琴の始めは弓六張。彈くや鋼女の神樂歌。笛は龍の吟ずる調子こちらが持遊びぴい〳〵鳴る。一文笛や笙の笛鳳凰の鳥の形。鵜殿の蘆は篳篥の舌鼓うつ。波の聲琵琶の形は近江の湖。一夜のうちに駿河の富士山孝靈五年に始まるとは。今辻々で女夫の讀賣年代記に書いて有る。ちんぷん漢字の始めは蒼頡いろはにほへとは弘法大師。墨は薛稷筆は蒙恬つくりしいはれ有馬筆。人形がひよつこり口から出次第問ひ次第。雛祭は嫁入の手ならひ兜は武藝稽古の始り。詞サ、天か前かの穴一は天下の法度の賭博の始り。地紙萬は養生の始め終りにけしとみなく。神道王法一々に問ふに隨ひ言ひ分くる。童子が口をかりそめに腹をかしたる母狐。側に在りとはしら菊の花のまにまに見えつ。隱れつ消えて。フシ形はなかりけり。詞ハアげにも〳〵疑ひなき狐の守護する希代の童子。篁盞內傳の書を明

らめ保名の虚名を晴らされよ。地其義を祝して道満が身不肖ながら烏帽子親。晴れ明らむるの字を以て晴明と名乗られよと。扇を開き煽ぎ立てあふぎ立つれば夫婦が悦び。元より先祖は安倍の仲麿名字を繼いで安倍野の出生。童子を安倍の晴明とはフシ此時よりも名づけたり。地道満重ねていづれもに對面し。詞日頃の願ひ達する上は早歸國と存ずれど。ついでながら信太の社是よりはいか程有る。イヤ僅か半道餘り保名案内仕らん。地月の夜すがら道すがら咄も且は慰みがてら。乘物やめていざ同道葛の葉は親達の。尋ね見えんも量られず。爰にて待てと夕月夜いそがぬ蘆屋に打連れてオクリ信太の森へと別れ行く。フシ時もこそ有れ。地悪右衛門葛の葉を奪ひ取らんと。手の者引具し追覓け來り。詞コリヤ〳〵藤次。足弱を同道すれば遠くは行かじと思ひの外。保名めは逃るとも鼻がおてきを手に入れよと。地きよろつく眼に乘物見付け。ヤア物くさしと立ちかゝり戸を押明くれば葛の葉親子。はつと驚き逃出づるどつこいさせぬと捻込み押入れ。おか様に子添迄保名を生捕る好き人質。急げ〳〵と乘物舁かせ引つ返す向ふより。詞コリヤ待て待てやらぬ奴がやらない乘物待てと棒端つかみ。こりや〳〵よい〳〵よい所へ丁度參つて與勘平。髭が手なみ忘れたか性懲もなき悪右衛門。サア乘物置いてつつぱしれ。命助けてこますのがそつちの爲にも與勘平。地但し首に代へる氣でフシごはりますかと睨付ける。地ヤア推參なる蕃椒めうぬが命は天井守り。奴豆腐に切碎けと主從拔連れ打つてかゝるを。かいくゞり〳〵切るより早い手づかみ料理。取つてはなげ〳〵さつてもあんばい與勘平フシハズミ逃ぐるをやらじと追うて行く。同錦地道引つちがへ又此處に。京より歸る與勘平。刀の鞘に狀箱結付けナホスフシひよこ〳〵來るを。地葛の葉悦び。詞ヲヽ手柄仕やつた出かしやつた。悪右衛門は逃げをつたか大勢と只一人。其方に怪我はなかつたかや。エヤア是は何仰しやる。奴めは旦那の御用一昨日の朝京都へ上り。左近太郎様に御目にかゝりお返事は此狀箱。安倍野迄戻つて見れば地思ひがけない庄司様御夫婦。お前のお噂かの様子びつくり直様參つたは只た今。詞手柄の手の字白癩覺えごはりませぬ。又あの人の卑下をいやる。悪右衛門が大勢追ばらやつた氣味のよさ。此葛の葉が能う見て居る。なんぼ見てござらうが覺えない與勘平。襄にも晴にも髭一人。葛の葉様なら二人も有る筈。但しお前が彼のではないか。減多に傍へ寄らしやますなと睫濡らせば。詞エヽ何いやる。其方こそど

き〳〵と紛らはしい與勘平。イヤお前がイヤわがみと。地爭ふ後へむら〳〵と取つて返す惡右衛門。アレ逃がすなと下知をなす。詞ヤアようこそ〳〵石川殿。手柄の覺え無かつたにさしに來た心中者め。とてもさしてくだんすなら前髪がよかろ物。剃りこくつた生男首。ア好い儘よ。高野六十那智八十取つてくれんと拔き放し。地切つてかゝればさしもの大勢。つゞ立つ足もなく逃げて行く。地葛の葉は童子を抱き。これ〳〵あぶない長追無用戻りや〳〵と身をあせる。弓手の畝より落合藤次。詞サア仕てやつたと引んだかへ宙に引つさげかけり行く。地尾花萱原蘭菊の茂みに有り〳〵與勘平。こりやさせぬわと投退くれば。ひるまず拔いて打ちかゝるを。まかせておけろが早速の早業トル三重切立て〳〵。追ひまくる。地親子は前後敵の中遁れん方なく乘物の。戸を引立て入る所へ。二人の奴は敵をはらひ東西より立歸り。爰は危し〳〵と乘物片手に差上げしは。肩も揃ひの六尺豐手柄も對の大はだぬぎ。一息つきしは阿吽の二王元服したる如くなり。地童子は物見に顏さし出し。詞母様あれを見さつしやれおれが兵衛が二人になつた。奴がぶんじた地與勘平と。手を打ちたゝけばげにげにさうだ〳〵。和子の詞で奴の詮議。コリヤそやつ。ソレ〳〵乘物おろして其處へ出をろさ。何さ〳〵詮議とは與勘平。うぬが五體もサア持出せろ

寛延元年竹本座雷斧

鹿屋滿道大内作

ヲヽサ出るわ。〳〵〳〵。サア出たわ。おれも出るわ。地サア出たわと奴と奴が顔見合せ。詞おれがわれか。われがおれか鼻の穴の不掃除迄。地微塵もかはらぬ奴服大紋。でつかり据ゑた三里の灸すりむけた迄違はぬ〳〵。つくね奴の同作ぢやとッシ互に。呆れしばかりなり。地葛の葉立出でこの詮議は仕やうが有る。詞是こちらの與勘平。そなたは幾年で奉公して。何處の生れぢやそれ聞かう。此髭めは丹波の生れ爺打栗が折檻強く。十一でお家へ參り足手かいさまに精出しても。高が下郎の精一ぱい。二合半の物相あたま。地すりこぼつたは十四の春一兩二歩の切米に。違ひない〳〵お前様もお聞きなされてッシどはりましよ。地成程々々主の咄にちがひない。詞サア此奴が身分は濟んだ其奴は又何處から出たどこから出たとは天から降らず地からも湧かず木の股からはなほ出られずお定まりの穴から出た。なんぢや穴から。はれ能う出たなあシテ切米はなんぼとりや。身が切米は十二文ひんねぢ紙の燈明代本社拜殿玄關前賽錢箱の皮覆。金紋大總隱れあらない受領神にぶつ仕へる。鳥居の馬場前踊しつかと踏んづけた。今地二合半の小豆飯色こそかはれ品こそかはれ。其お子產んだ白狐女郎はおらが中間の寄親殿だ。詞頼むに引かれずぬつと出た。今奴が出生地穴かしこ人に語るな。女郎女桔梗刈萱吾木香。身は蘭菊に遊べども咄の尾花はいつかな出さない。詞悪右衞門主從は此與勘平に打任せ。地親子の衆のお供して連れて退いたが與勘平ッシ心得たるかと言ひければ。詞さつてもさつぱり。申したり。地中間中の尻持とは頼もしい野干平。差圖にまかせお供せう。悪右衞門の若鼠あなづつて良にかゝるな。餘所ながら一曲見物と童子を背におひしげる。葛の葉がくれ草がくれオクリ忍びて へ事を窺ひねる。地石川が手足と頼む藤次藤内市八源太。腕に覺えの早縄十手狐としらぬ捕手の不覺。だまし寄つてはつしと打つ。ひらりと飛んで乘物の上にかるぐちよこ〳〵足。仕損じたりと追取卷き。四人四隅に手をかけてぐつと上ぐれば莞爾と笑ひ。祭過ぎてのお御輿豪輿ちやうさやようさ。あれ〳〵信太の神いさめッシ麦に聞えて。笛太鼓天罰神罰挫いでくれんと身は稻妻の通力自在。はた〳〵はつしと蹴倒す拍子。太鼓の拍子も面白や。小唄節にて唄かへろやれ我が古。塚へ戻ろやれ。我が古塚へ歸ろやれ。ナホス返せ返せと茅花の穂先亂るゝ薄秋の野の花をちらして 三重へ爭ひけり。ッシ狐の所爲に。地魂奪はれ五體ふぬけてよろぼふ奴ばら。引寄せ〳〵捻付け蹈み付け命がはり

の早剃刀。新刀のお髪剃いたゞけと耳鼻かけてどそ〳〵〳〵。すんぼろ坊主にすりこぼち弱腰ぼん〳〵續け踏み。四人は命から〴〵に頭かゝへて逃走れば。こんこんくわいけい悦びの。鳴く音も野路の夜嵐に フシ立ち紛れてぞ失せにける。

地道滿保名は下向道葛の葉親子與勘平。

右のあらまし語るにぞ是も偏に信太の明神。擁護の驗有難しと報賽の遙拜三拜猶行く先は草深き敵の伏兵氣づかひなり。詞挑燈ともせ與勘平。地ないと返事は以前の奴。向ふに忽ち フシ顯はれ出で。詞道の明りは我等の得物野山も一目に照耀く千疊敷の大燭臺。地それは蠟燭十二挺は狐の千丁立鳥千町里千町千年劫經る友呼聲。姿は消えて灯す火の千燈萬燈滿々月。光も滿る晴明親子出世の門を和泉路や信太の。森の故事を。あらたに寫す筆の跡語り。傳へて知るとかや

第五

地愼を知つて愼まざれば。禍遠きにあらずとかや。陰陽師安部の保名浪々の身の年月も。早八歳の晴明に自然と妙術備れるを。古主へ言ひ立て再び歸參を願はんと。西の京の旅宿より妻子引連れ行く道も。往來途絶えし一條の フシ橋詰にさしかかり。地あれ〳〵向ふへ見ゆるは左近太郎。是幸ひといふ間程なく互に行逢ふ橋の上。詞ヤア照綱殿何方へ。ヱ保名殿御親子御揃ひ。ハテ好い所でお目にかゝつた貴殿歸參の儀。御聞屆け有つて御赦免。其上御子息。才智勝れし段殊ない御賞美。地何卒天下の 博士にもなるべき間。明朝は參内せさせ其趣を奏聞せん。詞先づ今日召寄せ。對面なされんとの仰せ。それ故御子息迎ひの爲。今御宿所へ參る所。先づは吉左右拙者も滿足仕る。ハア、是は是は冥加に餘る仕合。好古卿の御憐愍は申すに及ばず。地偏に貴殿の御執成といふに葛の葉共に悦び。おなじみとて捨置かれず。段々の御世話お禮は詞に盡されず。圧上ながら御前の首尾宜しう賴上げまする。詞ア、何の〳〵懇意の仲にお禮は無益いざ同道仕らう。ハア いや〳〵。先年當所を立退きて。主君の御用を缺きたる某。いかに御赦免なればとて。お召も無きに押付けて參るは憚り。地悴さへ出世致せば。拙者が儀は苦しからず。罷歸つて明日の吉左右を待ち申さん。コリヤ女房。悴に付添ひ早く參れ。御苦勞ながら賴み入る。スリヤ是非共お歸りか。然らば御兩所伴ひ歸らん。フシさらば〳〵と立歸れば。地保名も跡へ引返す遙か向ふへ惡右衛門。數多の家來に長櫃昇かせ先に進んで歩み來る。シヤ曲者仔細ぞ有らんと保名は忍んで窺ふ所へ。程なく來る惡右衛門。

件の櫃を橘の半にどつかとおろさせ。主従あたふた押開き取出すは藁人形。詞家来ども口々に。見た所が風の神流行病の沙汰もないに。旦那こりや何なさるゝ。さればゝ〜仔細言はねば合點が行くまい。是ぞ日頃くいゝ〜思ふ六の君を。呪咀の爲以前も術にて呼出し。地肝心要でしくじつた。それ故今度は丈夫に仕かけ。居ながらころりとやるつもり。彼の道滿の内股膏藥。頼んでは却つて妨げ。詞不斷はしゝ〜聞き覺えた術を行ひ。是を見よこの如く。四十四本の釘を打ち呪咀の文を書付け。此川へ打込む思案。コリヤコリヤ家來どもみぞろが池に懲り果てた。地そこらに非人は居らぬかと。穿鑿させてよいわ〜をらぬは重疊サア用意と聞くより保名飛んで出で。前後の家來を取つて投退け踏飛し。人形もぎ取り聞いた〜殘らず聞いた惡事の根組。殊に段々意趣有る仲。遁れは有らじ覺悟せよ。ヲヽ是を露顯せられては。主君の大望後日の仇。此方の覺悟よりうぬが身躰に暇乞ひ。それ家來ども遁すなと打つてかゝれば心得たりと拔合せ。かゝれば拂ひ裾を擲れば飛び違ひ。付入れば打開き秘術を盡し働きしが。運の極が橋板に。けしとむ所を付入り付込み。ばつた〜大勢寄つて連枷切り。フシ敢なく息は絶えにけり。詞ハヽア氣味能う死ばつた。ヤ跡の難儀は如何なるゝ。ヲヽサ合點此櫃に死骸人形相住させ。地深みへづぶ〜氣づかひするなと。主從櫃へ押込み捻込み秘封をつけ。サア〜かゝれと手々に舁上げ。さんぶと打込む川流れ。サア仕すました〜。者ども來れと引連れて。我が家をさしてぞ三度入行く空の。雲井長閑き大内山内宴を行はれ。群臣諸卿參列し君を壽き奉る。櫻木の親王御褥に着き給へば。續いて左大將橘元方。參議小野好古御座近く伺候して。葛の葉親子を御階に召連れ請んで奏せらるゝは。詞愚臣が家來安倍保名が悴晴明。今年八歳いまだ幼稚と申せども。陰陽道に妙術を得れば。則ち帝都に居住させ蘆屋の道滿兩家として。天下の安危を奏せば。地御代長久の基ともなり候はんと言上あれば。右大將聞きもあへず。詞コレ〜好古其保名とは加茂の保憲が末弟。陰陽未熟のうつけ者。先年都を逐電し。賣卜者辻八卦に身命を繋ぐと聞く。其中に儲けたる晴明とやら。あくちもきれぬ小悴。陰陽道の妙術こは事をかしき奏聞。地今一天下にならびなき蘆屋の道滿有るからは。占も御祈禱も一人で有りあまろ。詞コリヤコリヤ悴願は叶はぬ。退參せよと無法の詞。地聞兼ねて葛の葉こは心得ぬ御仰せ。詞稚き者とて侮らば。唐土の陸雲は六歳にて。

文をよくし書を諳んじたる例もあれば。一概には言はれぬ物。それに何ぞや雲突く様な形をして。小い者をやりこめ〳〵。エ何ぢやの。地あたどんくさいと詞もずつかり顔も色立ちせき上ぐれば。詞ヤア鈴振のべり〳〵め。元方に向つて緩怠至極。アレ引立てよと下知すれば。地親王しばしと鎭め給ひ。詞元方の詞一理有りと雖も。好古の心無下にも成るまじ。所詮論は無益。稚き者が妙術を目前に見るならば。地彼等が願に任すべしと下を惠みの御詞。末世に村上天皇と仰がれ給ふも理なり。地折こそ有れ左近太郎照綱。長櫃御前に昇きするさせ。詞貢を納むる近郷の百姓ども。一條の邊にて此櫃を拾ひし所。下にて開き見ん事上を憚り上覽に供へ奉ると訴ふれば。地諸卿も怪み元方は胸に覺の有る長櫃。詞コリヤコリヤ左近見苦しい雜物大内の穢持つて立てと。地苛てば親王とゞめ給ひ。詞中の知れざる長櫃是ぞ幸ひ。道滿晴明立並び中を未然に考へさせよと。地仰に元方力及ばず。詞コリヤ〳〵小悴。若し汝仕損ぜば遠島さすが合點かと。地勝手だらけな詞詰。それ〳〵と有りければ非藏人の申次。司天臺に控へたる陰陽の頭蘆屋の道滿。裝束更め召に應じてしづ〳〵と御階間近く座に着けば。地元方打笑み。ヤレ待兼ねた見通し殿。詞是れ此櫃の中を考へあの小童奴を挫いでたも。地はつと答へて道滿。詞コレ〳〵晴明。先づ其方から考へられよ。イヤ其許から言上有れ。地然らば拙者申上げんと眼を閉ぢ。方角を繰り時刻を合せ謹んで。詞ハ、ア是は正しく二人の體。一人は假に形を設けし物。今一人は三十有餘の男双にかゝりし死骸にて候と。地言上すれば元方點頭き。ヲ、今に始めぬ汝が考へさうで有らう。サア〳〵悴は何と〳〵。はつといふより袂の内。指繰返せば道滿が。察所寸分たがはず。南無三寶。先を越されし口惜しやと轟く胸を押ししづめ。暫く思案し。成程道滿申さるゝ通り。一人は假の形今一人は三十有餘の男双にかゝり候へども。未だ落命とは見えず魂魄五體を去らされば。地悉なしといふに喫驚。コレコレ晴明。詞此道滿が申す所汝が胸に徹しなば有様に申されよ。元占は一體の氣を考ゆれば互に合ふまい物でなし。少しにても相違せば汝が身の一大事。今一應工夫有れと氣の毒顔に占問へば。葛の葉は猶氣遣ひ。詞コレ〳〵晴明。兩方の考一致したとて恥にはならず。なまなか其方が我を張つて品かへんとばし思やんな。微塵でも違うては地大事の所ぢやとつくりと氣をしづめて申上ぎや。蓋を明けぬ其内は言直しても仕直しても。際が

入つても大事ないと。側からあぶ〳〵井戸の端ッシ子を思ふ身ぞ道理なる。地瀧口に差控へ始終を聞居る悪右衛門。折よしとつつと出で。詞陰陽道に妙術を得し者が言ひ直しは成らぬ〳〵。もし蓋あけて死骸が出でばゆるさぬが合點かと。地己が覺えしたり瀬元方に目と目を見合せ。嘲る詞を耳にもかけず。詞母様氣遣ひなさるゝな。とてもの事に刀疵立ち所に平癒させ。地御覽に入れんと直垂の袖を結んで肩にかけ。幣帛取つて禮拜し。詞南無大聖文殊薩埵。一度結びし奇縁を違へず。力を添へてたび給へと傳へ請けたる大山玉の。密法生活續命の秘文を唱へ。諸神諸佛を勸請有る。

晴明蘇生の祈

謹上。再拜。〳〵。敬つて申し奉る。ッシ地神は元來正直の頭を照す日の本の。いとも尊き宮所。ッシ五十鈴の流清らかに。影をうつして。三熊野は。事解男速玉男飛瀧權現王子權現九十九所。納受有つて給れと鈴押取つてちりん〳〵。一字金輪金峰山藏王權現立像權現。葛城七體金剛童子。我も童子の。其一つ。歸命々々と名にも。立田の。合紅葉ばや。錦織るてふ糸筋の。三曲殘りて三輪の山。三笠の山にほの〴〵と月。住吉の神神樂巫女が小鼓。打つたり舞うたりオクリ幣帛。取換へひら〳〵ひらり。合ひらりクリ開くる梅の宮。花は散りても根にかへるギンオクリ歸れや。かへれとコハリ呼子鳥。錫杖取つて振立て振立て。高き御山は愛宕山。鞍馬山には地ナホス多門天君國增長廣目の。ッシ四天王にも先立つて。神道如意の駒に鞭を。打ちかけ〳〵。雲に乘り三千。世界を廻る羣駄天王。コハリ孔雀明王大威德。見せしめ給へと又振立てナホスから〳〵から羽迦羅制多加コハリ不動愛染。扨王城には加茂八幡。ま猿めでたき山王權現多賀の神。假へ定業限命なりとも。拔苦與樂の肩を垂れ。一度蘇生させてたべと肝膽碎き直垂をナホス汗に浸して三度祈りける。行力修法の登にや東西より數多の烏。むら〳〵さつと飛來り櫃の上に寄集り。暫く啼く聲憂ひを呼び又立上つてくる〳〵くる。くるり〳〵と飛廻り。悅びの聲嗔く ッシ四方に別れて飛去りけり。地晴明虛空を禮拜し疑もなき蘇生のしるし。サア〳〵蓋を開かれよと聞きもあへず悪右衛門。詞ヤア小童奴がほでてんがう。地明けて恥をかゝせんと櫃の蓋に手をかくれば。めり〳〵はつしと打碎きによつと出でたる安倍の保名悪右衛門が髮束摑んでどうど打付け足下に踏へ。詞左大將と心を合せ六の君調伏の此人形。地遁れぬ所

と踏みつけ〳〵剣難不思議に蘇生の保名。娑婆に再び戻橋 ッ。此時よりぞ名づけける。地始終を聞いて左近太郎。ヲ、一度に懲りぬ天命しらずと高欄に手をのばし左大将をかい摑み引つかづいて投付くれば。道満しばしと押しとゞめ御前に向ひ。詞罪人とは申しながら御息所の御父。命の儀は御赦免と恐れ。入つて願ひける。ヲ、地神妙なり道満。汝が願にまかせ遠島流罪。悪右衛門は保名親子が心任せに計らふべしと。仰を聞くより勇をなし。詞おのれに討たれし保名が敵本望遂げるも。此保名と。地寸断〳〵に切放せば。親王御感浅からず晴明に官位を授け。道満諸共天下の博士末の代迄も晴明と。云傳へ書傳へ。家の波風動きなき御代に羽をのす雛鶴の。鶴トの八數大八洲君萬歳の壽に。民千歳の五穀成就富みさ。かふるこそ目出たけれ